

第19回名古屋大学博物館企画展記録  
医学教育の曙からノーベル賞まで  
—名古屋大学創立70周年（創基138周年）記念—

Record of 19<sup>th</sup> NUM Special Display  
“From the Dawn of Medical Education to the Nobel Prizes.  
— the 70<sup>th</sup> Anniversary of Nagoya University —”

堀田慎一郎 (HOTTA Shinichiro)<sup>1)</sup>・西川輝昭 (NISHIKAWA Teruaki)<sup>2)</sup>・  
羽賀祥二 (HAGA Shoji)<sup>3)</sup>・蛭薙観順 (HIRUNAGI Kanjun)<sup>2)</sup>・  
山口拓史 (YAMAGUCHI Takuji)<sup>1)</sup>

- 1) 名古屋大学大学文書資料室  
Nagoya University Archives
- 2) 名古屋大学博物館  
The Nagoya University Museum
- 3) 名古屋大学大学院文学研究科  
Graduate School of Literature, Nagoya University

場所：名古屋大学博物館（古川記念館）3階展示室

会期：2009年10月17日(土)～12月26日(土)

主催：名古屋大学博物館／名古屋大学大学文書資料室

本記録は、名古屋大学創立70周年記念事業としておこなわれた、第19回名古屋大学博物館企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで —名古屋大学創立70周年（創基138周年）記念—」（以下、「本企画展」と略）の展示内容を中心に記録したものである。

本企画展は、会期中に4,920人の入場者を得て、好評のうちに幕を閉じた。とくに10月24日の第5回ホームカミングデーでは、1日で1,120人も入場者があり、その成功に大きく貢献した。

また本企画展は、名古屋大学の歴史全体を通史的に紹介する本格的な展示会としては初めてのものであり、画期的な意義を持っている。

また、以下の文章でもふれたが、本企画展の実施にあたっては、上に挙げた教員（所属はいずれも当時）のほか、名古屋大学大学文書資料室非常勤研究員の中元崇智氏と今村直樹氏、同室事務補佐員の田渕宗孝氏（名古屋大学大学院情報科学研究科研究生）、李主先氏（名古屋大学大学院文学研究科博士課程（後期課程）大学院生）、中村史信氏（名古屋大学大学院文学研究科博士課程（後期課程）大学院生）の協力を得た（所属等はいずれも当時）。

なお、本企画展の記録としては、堀田慎一郎「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで —名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念—』」（『名古屋大学大学文書資料室紀要』第18号、2010年3月）も参照されたい。

## 展示の方針と準備作業

本企画展の内容について、本格的な検討をはじめたのは、2008年8月からである。当初、検討に参画したのは、名古屋大学博物館（以下、「博物館」と略）から西川輝昭館長、名古屋大学大学文書資料室（以下、「資料室」と略）から羽賀祥二室長、山口拓史室員、堀田慎一郎室員の4人であった。この「大学史展示ワーキンググループ」が、展示内容の大枠を決める場となった。その後、山口室員が2009年3月末で退職したため、メンバーは3人となった。また、同年9月15日には西川館長が退職したため、博物館の蛭薙観順准教授が加わった。

もっとも、本格的に展示の準備作業に着手したのは、会場に想定されていた博物館3階の新展示室の工事の実施が決定し、名古屋大学創立70周年記念事業予算の枠組みもほぼ定まって、本企画展が記念事業に関わる総長裁量経費によって開催されることが確実となった2009年1月からであった。開催決定までの経緯については、前掲堀田「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで—名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念—』」を参照されたい。以後、大学史展示WGで検討を重ね、3月には展示内容の方針・骨子がほぼ固まった。

展示方法は、学術的な調査を前提としながらも、研究者でなくても展示内容を十分に理解できるようにすることを重視した。これは本企画展が、名古屋大学の歴史を社会に広く普及することを目的の一つにしたからである。

そのため、物品資料は1点1点の価値や面白さを重視して展示し、キャプションや説明文もできるだけ短く、かつ分かりやすくなるようにした。これによって犠牲になったストーリー性については、展示パネルによって担保することにした。ただそれも、写真と図表を中心として、文章は極力少なくすることをめざした。また、視聴覚機器を積極的に活用し、映像や動画による展示コーナーを設け、さらに入場者が直接手に取って閲覧できる資料を設置するハンズオンコーナーにも力を入れることにした。

展示で扱う範囲は、名古屋大学の歴史を通史的に理解できる内容を盛り込むと同時に、創立70周年に即した名古屋帝国大学の創設に関わることと、創基138周年に即した愛知医学校（その後の愛知県立医学専門学校・愛知医科大学・名古屋医科大学時代も含む）に関わることの2つを特集することにした。さらに、歴史をふまえて、現在の名古屋大学についても理解できるコーナーを設けることになった。また、展示室が新しくはあるものの約153m<sup>2</sup>と余裕があるわけではないことに鑑み、前身学校である第八高等学校、名古屋高等商業学校、岡崎高等師範学校については、今回は本格的には取り扱わないこととした。

第八高等学校については、すでに第15回名古屋大学博物館企画展「伊吹おろしの若者たち—八高創立百年の歴史から—」（2008年10月7日～11月8日）が開催されていた（主催：博物館・資料室）。また、名古屋高等商業学校については、のちに第20回名古屋大学博物館企画展「響け!! 創統の鐘—名高商から名大経済学部への90年—」（2010年11月3日～12月18日）が開催された（主催：博物館・資料室・名古屋大学経済学部・社団法人キタン会）。

さて、こうした大枠が決まったあとは、展示パネルや映像コンテンツの製作、展示物の選定などの具体的な作業に入った。展示パネルの製作は、第1コーナーは西川博物館長が担当し、それ以外は堀田資料室員が、中元崇智非常研究員、今村直樹非常勤研究員および田淵宗孝事務補佐員の協力を得て担当した。後述するスライドショーについては、堀田資料室員の指揮の下、今村非常勤研究員が実作業を担当した。また、これも後述するハンズオン資料については、羽賀資料室長と堀田資料室員の

監修の下、田淵事務補佐員を中心に、李主先事務補佐員、中村史信事務補佐員がスタッフが作業にあたった。

また、写真資料については、資料室において同時進行で進められていた創立70周年記念図録（名古屋大学編刊『知と創造の拠点 名古屋大学の歴史』、2010年10月17日）の編集作業で収集された貴重な写真資料を積極的に活用した。

## 展示内容とその特徴

### ①パネル展示

展示パネル（72.5cm×103cm）の具体的内容については、本記録に全パネルをそのまま掲載したので参照されたい。また、前掲堀田「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで 名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念一』」には、それらがカラーで掲載されている。

製作にあたっての方針は、前述した通りである。戦前期を扱うパネルについては、どうしてもモノクロ写真が多くなりがちなので、カラーの絵図や図表などをできるだけ用いるようにした。

そして、今回のパネル展示の目玉として製作したのが、「名古屋大学の歴史年表」と「名古屋大学の歴史地図」であった（いずれも本記録に掲載、カラー写真は前掲堀田「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで 名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念一』」に掲載）。

歴史年表は、名古屋大学創基138年の歴史を、350cm×119.5cmの大パネルにまとめたものである。名古屋大学の本格的な歴史年表といえば、1991年に刊行された名古屋大学史編集委員会編『写真集 名古屋大学の歴史 1871～1991』（名古屋大学刊）の巻末年表があるくらいで、1995年刊行の名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一、同通史二（いずれも名古屋大学刊）では、編さんの結果をふまえた年表があらためて作成されることはなかった。そのため、最近の20年間のことを盛り込みつつ、それ以前の年代についても『名古屋大学五十年史』やその後の研究をふまえて作成された年表が求められていた。さらに今回、前述の創立70周年記念図録でも、各章の冒頭にそれぞれの時期の年表を大きく掲載した。こうして、正確な年表をある程度の時間と手間をかけて作成できたことは、創立70周年事業における成果の一つに数えられる。この年表パネルは、入場者の方々が思い思いの時代の箇所足に止めて観覧する場面が多く見られ、とくに好評を博した。

歴史地図は、名古屋大学および前身諸学校のキャンパスの変遷を、名古屋を中心とする地図や当時のキャンパスの写真等を用いて、これも224cm×119.5cmの大パネルで図示したものである。内容は、資料室の折りたたみ式パンフレット（Zカード）の歴史地図を増補して拡大したもののだが、大パネルの迫力は入場者の目を引いた。

現在、これらの歴史年表と歴史地図は、名古屋大学博物館に常設展示されている。

### ②物品展示

次に物品展示であるが、これらについても本記録に全展示物の写真とリスト（キャプションおよび説明文を含む）を掲載した。また、前掲堀田「企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで 名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念一』」には、カラー写真で掲載されている。

その原物の多くは、資料室と博物館に所蔵されているものである。資料室と博物館では、これまで名古屋大学の歴史に関わる物品資料の収集に努めてきたが、今回の展示でその成果の一端を世に問うことができたのは幸いであった。展示ケースは、博物館が元々保有していたものに加え、

新展示室の設置にともなって新しいものを購入して、大小合わせて14のケースを用意し、比較的多くの物品を展示することができた。また、将来の常設展で展示することを想定して、とくに貴重かつ経年劣化しやすいものについては、予算の許す限りにおいて精巧なレプリカを製作して展示した。

中でも、名古屋大学の創基に関わる明治初期の展示資料の多くは、資料室所蔵の柴田邵平関係資料から選んだ。柴田邵平は、愛知医学校の創立に関わったのち、同医学校の教員になった人物である。その旧蔵資料からなる柴田邵平関係資料は、本学のみならず、東海地方はもちろん、全国的レベルにおいてすら大変貴重な歴史資料群といえる。

そして、会場の入口に展示して、本企画展のシンボリック的存在になったのが、2つの後藤新平自筆書掛軸のレプリカである（現物は個人が所蔵）。これらは、後藤新平が愛知医学校長の時代に、同医学校教員の柴田邵平に自作の漢詩を揮毫して贈ったものである。現在、これらのレプリカは、名古屋大学博物館に常設展示されている。

本企画展は、全体としての展示内容の充実度には自負するものがあったが、話題性のある、1つだけで人を引きつけるインパクトのある展示物があればこの上なかった。そこで、193cm×65cmと175cm×42cmという寸法を持つこれらの掛軸に白羽の矢を立てた。しかし、将来これらを常設的に展示するには、セキュリティの問題もあり、原物のままというわけにはいかない。そこで、これもレプリカを作成し、展示台を特注して展示することにした。

そのほか、数点の名古屋帝国大学時代の行政文書を展示した。これらは、レプリカではなく原物である。比較的多くの文書が残っているため、短期間で展示物を入れ替えることができるので、あえて原物を用いた。分厚い簿冊が多いため、内容を見せることが難しいという欠点はあるが、こうした70年前の創立期の行政文書を資料室が所蔵し、申請さえすれば閲覧も可能（経年劣化がいちじるしい場合はコピーでしか閲覧できない場合もあるが）であると示すことは、大学アーカイブズの普及の観点からも意義は大きい。

また、1960年前後の名古屋大学の学生生活を物語る物品を、2つの展示ケースに集めた。多くは印刷物やビラなどであるが、こうした資料は、多数に配布されたものであるがゆえに、かえって体系的な収集がなされず、意外に後世に残りにくいものである。今回の展示物は、この年代の文学部卒業生の1人から資料室が寄贈を受けた資料を用いた。

### ③映像・動画コーナー

パネルや物品といった、静止している展示の制約・単調さを補うため、映像や動画のコンテンツを用意することは、最近の展示活動における有効な手段といえる。本企画展では、次の4つの映像・動画をモニターで上映した。モニターはいずれも小型であり、とくに1)は、本来なら大画面で上映したいところだったが、準備できるモニターや会場の広さの制約でやむをえなかった。

- 1) 「名古屋大学のあゆみ ―キャンパスの変遷―」(フラッシュ, 資料室製作)
- 2) 「名古屋大学豊田講堂 1960-2005」(DVD, 資料室製作)
- 3) 「名古屋大学プロフィール DVD」(DVD, 広報室製作)
- 4) 「名大の授業」(DVD, オープンコースウェア委員会製作)

1)は、本企画展のオープンに合わせて初上映したスライドショーであり、費用的にも時間的にも、最も力を入れた企画の1つといえる。

すでに資料室では、2005年度の総長裁量経費を得て、この「名古屋大学のあゆみ」を製作してい

た。これは、名古屋大学やその前身諸学校のキャンパスの歴史を、写真やコンピューターグラフィックス等を用いながら紹介したもので、第1部「名大キャンパスの変遷」(10分)、第2部「東山キャンパスの発展」(15分)からなっていた。このスライドショーは、名古屋大学の各種イベントや、名古屋大学の歴史に関わる講義や講習などに広く活用しているが、最も古い歴史を持つ鶴舞キャンパスを特集したコンテンツがないことが大きな課題であった。

そして今回、本企画展の経費(創立70周年記念事業の総長裁量経費)の中に、鶴舞キャンパス編を製作する費用を確保することができた。これによって製作されたのが、第三部「鶴舞キャンパスの発展」(15分)である。また第2部においても、東山キャンパスの現状に合わせ、2005年以降に建設された建物の紹介などを増補した。シナリオの作成や使用する写真の選定を資料室がおこなったうえで、これを業者がフラッシュによるスライドショーに仕上げる形をとった。

この第3部は、名古屋大学医学部が所在する鶴舞キャンパスの歴史を、前身校時代をふくめて概観したものである。キャンパス内の建物配置や敷地の変遷、戦災からの復興過程、最新の建物などを分かりやすく解説している。また、鶴舞移転前の天王崎(現在の名古屋市中区栄1丁目)の校舎や、建設途中の鶴舞校舎など、近年見つかった写真も積極的に盛り込んだ。

まだ大幸や豊川のキャンパスは残っているものの、総説編と主要キャンパスである東山編と鶴舞編がそろったことにより、スライドショー「名古屋大学のあゆみーキャンパスの変遷ー」は一応の完成をみたといえる(現在は、資料室のホームページで視聴することができる)。

2)も、資料室が製作したスライドショーである。これは、2005年の第1回名古屋大学ホームカミングデイにおける企画展「豊田講堂 1960-2005」(資料室主催)で初上映したもので、「豊田講堂のプロフィール」(5分)、「豊田講堂の建設寄付」(8分)、「建築物としての豊田講堂」(6分)からなっている。本来は、2007年12月に竣工した、豊田講堂の大規模な改修・増築工事のことを盛り込んで増補したかったが、予算と時間の関係で他日を期することとし、1)の第2部の増補で少しふれるにとどめた。

3)は、創立70周年記念事業の一環として名古屋大学が製作した広報用のDVD(17分)であり、名古屋大学の歴史を簡単にふまえたうえで、現状が手際よくまとめられている(名古屋大学ホームページから視聴可能)。

また4)は、名古屋大学の代表的な教員が、自らの講義について図や写真をまじえながらそれぞれ1分間程度で説明するものである。本来は、インターネットサイトで一般公開しているものがあるが、今回はとくにオープンコースウェア委員会に依頼して、教員をさらにピックアップしたうえでDVDにまとめてもらった。

#### ④ハンズオンコーナー

一般に、展示物(物品やパネルなど)をどのように、あるいはどの部分を見せるかという選択は、展示する側に委ねられている。その意味で、観覧者が直接手に取って閲覧できる資料の展示は、観覧する側が選択肢を持つことができる貴重な機会を提供するものであり、これを上手く使うことの意義は小さくない。

本企画展では、こうした資料を閲覧に供するハンズオンコーナーの充実にも力を入れた。実際にこのコーナーに設置したものは、1)「名古屋大学 Who's Who?」、2)「名大祭の50年」、3)体育会・文化サークル紹介、4)『我等の学園』、の4つである。

この中で、最も人員と時間を投入したのは1)である。1)は、名古屋大学の歴史の中で重要な役

割を果たした人物、あるいは名古屋大学を卒業・修了した後に学界や社会で大きな事績を残した人物などをピックアップし、1人あたり決まった様式のA4用紙1枚で紹介するものである。顔写真は必ず掲載し、そのほかの写真も積極的に載せるようにした。用紙はラミネートフィルム処理し、閲覧しやすいように配慮した。なお、堀田慎一郎『名古屋大学歴代総長略伝 ―名大をひきいた人びと―』（名大史ブックレット13、名古屋大学大学文書資料室、2009年）に掲載されている人物については、同書を同じハンズオンコーナーで閲覧できるようにして、今回は製作しなかった。

大学の歴史を、人物を通じて紹介する場合に難しいのは、やはり取り上げる人物の選定である。誰もが異論のないような人物だけなら無難であるが、それでは範囲が限られ、いつまでも同じ人物の紹介を繰り返すことになりかねない。しかし、A4用紙1枚とはいえ、刊行物やインターネットの記述を鵜呑みにせず、厳密な調査により確実なデータを集め、膨大な事績から適切なものを選択して、限られた字数にまとめる作業は、相当な手間のかかるものである。

そこでこの企画は、名大史上の人物データを蓄積していく長期的な事業の一環として位置づけることにした。したがって、本企画展の終了時において取り上げられている44人が、名大史を最も代表する人物であるというわけでは必ずしもなく、これからも定期的に少しずつ人数を増やしていく予定である。

こうして、言うなれば「名大史人物データベース」を完成に近づけていこうというのが、本企画の意図といえる。ただ、この意図を展示会場で明示しなかったため、人物の選定に不満を感じた方も少なくなかったと思われ、この点は反省すべきだろう。

2) は、この年までの全50回の名大祭パンフレットのコピーである。それぞれの回の、表紙と興味深い1ページをA4用紙の表と裏に印刷し、やはり1枚ずつラミネートフィルム処理をした。これにより、各年代の名大祭の雰囲気を実感したり、懐かしんだりすることができると同時に、世代を超えて50年間の変遷を理解することができる。これについても、年々増補していく予定である。なお、全ての回のパンフレットをそろえるにあたっては、資料室所蔵のバックナンバーから洩れている分を、名大祭本部実行委員会の協力によって補うことができた。ここにあらためて謝意を表したい。

3) は、体育会と文化サークル連盟の協力により、部やサークルにそれぞれA4用紙1枚で写真を入りの紹介記事を書いてもらい、これをラミネートフィルム処理したものである。これについては、決まったフォーマットを定めなかったことなど、コンセプトが今一つ明確でなかったこともあり、必ずしも十分な数が集まらず、反省すべき点が多かった。

4) は、名古屋帝国大学初代総長の洪沢元治が、学生と鍋などを囲みながら交流をはかる「総長懇談会」で配布した小冊子を、写真撮影により簡易複製したものである。

## 関連行事等

### ① SMBC（三井住友銀行）パーク栄 セミナー講演

羽賀 祥二「名古屋大学の歴史を語る」（2009年10月31日、SMBCパーク栄）

堀田慎一郎「名古屋帝国大学の誕生と草創期」（2009年11月18日、SMBCパーク栄）

### ②名古屋大学博物館特別講演会

第1回 羽賀 祥二「名古屋大学の歴史を語る」

(2009年10月24日(土), 第5回ホームカミングデー当日, 13時~14時30分)

第2回 高橋 昭 (名古屋大学名誉教授)「名古屋大学医学部の揺籃期」

(2009年11月12日(木), 15時~16時30分)

第3回 堀田慎一郎「名古屋帝国大学の誕生と草創期」

(2009年11月26日(木), 15時~16時30分)

第4回 杉山 寛行 (名古屋大学理事・副総長)「名古屋大学の教育と研究の現状」

(2009年12月10日(木), 15時~16時30分).

※ 会場はいずれも名古屋大学博物館講義室

### ③全学同窓会関東支部新年交流会展示

名古屋大学本部から, 2010年1月14日(木)に開催される全学同窓会関東支部新年交流会の会場(東京・学士会館)において, 本企画展を再展示したいとの要望があった. これをうけて, 本企画展の内容の一部を, 「医学教育の曙からノーベル賞まで 一名古屋大学創立70周年(創基138周年)記念」<sup>1)</sup>として展示した.



展示室の様子①



展示室の様子②



展示室の様子③



展示室の様子④





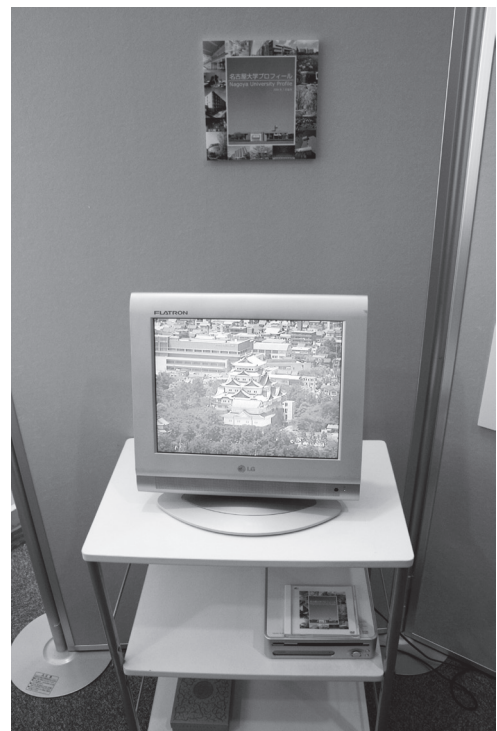
展示室の様子⑤



展示室の様子⑥(ハンズオンコーナー)


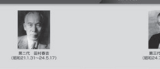







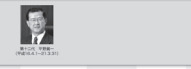

展示室の様子⑦ (スライドショー)



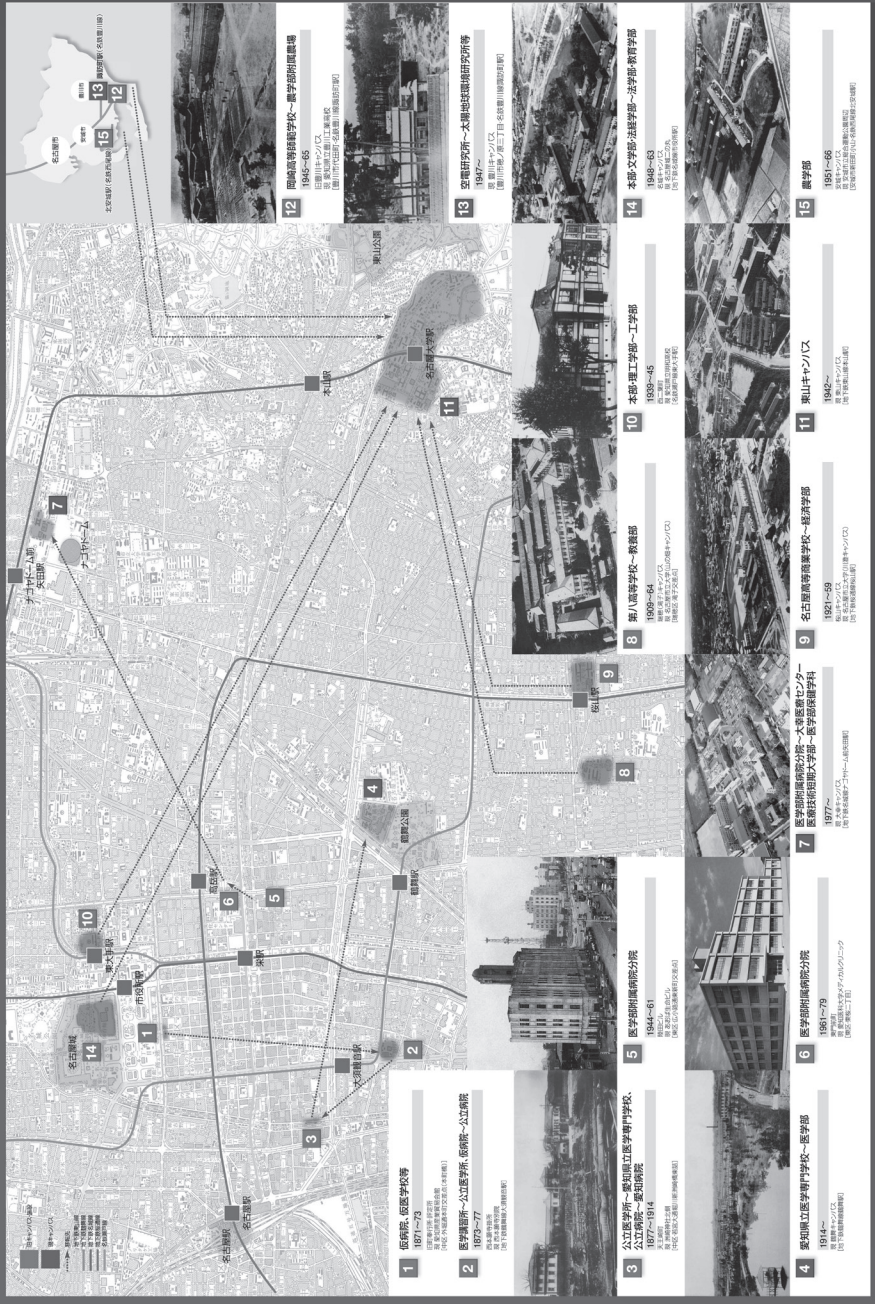
展示室の様子⑧ (名古屋大学プロフィール DVD)

# 名古屋大学の歴史年表

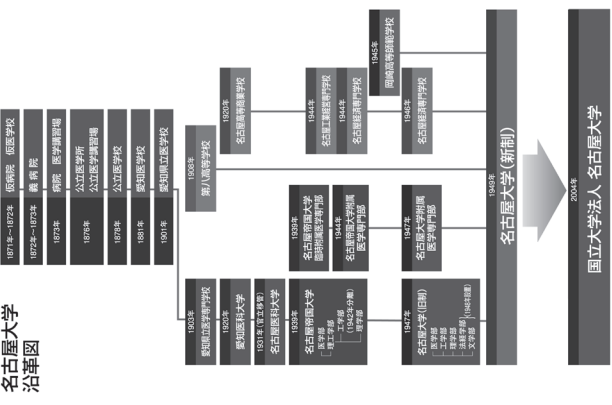
年代	1871	1875	1900	1925	1950																																																																																									
沿革	明治		大正	昭和																																																																																										
前身校	名古屋帝国大学			名古屋大学 (旧制)	名古屋大学 (新制)																																																																																									
歴代校長																																																																																														
年	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881	1882	1883	1884	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
事件	<p>1871年 医学部創設</p> <p>1872年 理学部創設</p> <p>1873年 文学部創設</p> <p>1874年 工学部創設</p> <p>1875年 農学部創設</p> <p>1876年 法政学系創設</p> <p>1877年 経済学系創設</p> <p>1878年 教育学系創設</p> <p>1879年 音楽学系創設</p> <p>1880年 美術学系創設</p> <p>1881年 歯学部創設</p> <p>1882年 薬学部創設</p> <p>1883年 獣医学部創設</p> <p>1884年 農学部改組</p> <p>1885年 工学部改組</p> <p>1886年 文学部改組</p> <p>1887年 理学部改組</p> <p>1888年 医学部改組</p> <p>1889年 法政学系改組</p> <p>1890年 経済学系改組</p> <p>1891年 教育学系改組</p> <p>1892年 音楽学系改組</p> <p>1893年 美術学系改組</p> <p>1894年 歯学部改組</p> <p>1895年 薬学部改組</p> <p>1896年 獣医学部改組</p> <p>1897年 農学部改組</p> <p>1898年 工学部改組</p> <p>1899年 文学部改組</p> <p>1900年 理学部改組</p> <p>1901年 医学部改組</p> <p>1902年 法政学系改組</p> <p>1903年 経済学系改組</p> <p>1904年 教育学系改組</p> <p>1905年 音楽学系改組</p> <p>1906年 美術学系改組</p> <p>1907年 歯学部改組</p> <p>1908年 薬学部改組</p> <p>1909年 獣医学部改組</p> <p>1910年 農学部改組</p> <p>1911年 工学部改組</p> <p>1912年 文学部改組</p> <p>1913年 理学部改組</p> <p>1914年 医学部改組</p> <p>1915年 法政学系改組</p> <p>1916年 経済学系改組</p> <p>1917年 教育学系改組</p> <p>1918年 音楽学系改組</p> <p>1919年 美術学系改組</p> <p>1920年 歯学部改組</p> <p>1921年 薬学部改組</p> <p>1922年 獣医学部改組</p> <p>1923年 農学部改組</p> <p>1924年 工学部改組</p> <p>1925年 文学部改組</p> <p>1926年 理学部改組</p> <p>1927年 医学部改組</p> <p>1928年 法政学系改組</p> <p>1929年 経済学系改組</p> <p>1930年 教育学系改組</p> <p>1931年 音楽学系改組</p> <p>1932年 美術学系改組</p> <p>1933年 歯学部改組</p> <p>1934年 薬学部改組</p> <p>1935年 獣医学部改組</p> <p>1936年 農学部改組</p> <p>1937年 工学部改組</p> <p>1938年 文学部改組</p> <p>1939年 理学部改組</p> <p>1940年 医学部改組</p> <p>1941年 法政学系改組</p> <p>1942年 経済学系改組</p> <p>1943年 教育学系改組</p> <p>1944年 音楽学系改組</p> <p>1945年 美術学系改組</p> <p>1946年 歯学部改組</p> <p>1947年 薬学部改組</p> <p>1948年 獣医学部改組</p> <p>1949年 農学部改組</p> <p>1950年 工学部改組</p> <p>1951年 文学部改組</p> <p>1952年 理学部改組</p> <p>1953年 医学部改組</p> <p>1954年 法政学系改組</p> <p>1955年 経済学系改組</p> <p>1956年 教育学系改組</p> <p>1957年 音楽学系改組</p> <p>1958年 美術学系改組</p> <p>1959年 歯学部改組</p> <p>1960年 薬学部改組</p> <p>1961年 獣医学部改組</p> <p>1962年 農学部改組</p> <p>1963年 工学部改組</p> <p>1964年 文学部改組</p>																																																																																													
備註	<p>※同一年の出来事は、表の下の順番に記述しました。</p>																																																																																													

1975	平成		2000																																	
1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009		
校長																																				
事件	<p>1975年 工学部改組</p> <p>1976年 文学部改組</p> <p>1977年 理学部改組</p> <p>1978年 医学部改組</p> <p>1979年 法政学系改組</p> <p>1980年 経済学系改組</p> <p>1981年 教育学系改組</p> <p>1982年 音楽学系改組</p> <p>1983年 美術学系改組</p> <p>1984年 歯学部改組</p> <p>1985年 薬学部改組</p> <p>1986年 獣医学部改組</p> <p>1987年 農学部改組</p> <p>1988年 工学部改組</p> <p>1989年 文学部改組</p> <p>1990年 理学部改組</p> <p>1991年 医学部改組</p> <p>1992年 法政学系改組</p> <p>1993年 経済学系改組</p> <p>1994年 教育学系改組</p> <p>1995年 音楽学系改組</p> <p>1996年 美術学系改組</p> <p>1997年 歯学部改組</p> <p>1998年 薬学部改組</p> <p>1999年 獣医学部改組</p> <p>2000年 農学部改組</p> <p>2001年 工学部改組</p> <p>2002年 文学部改組</p> <p>2003年 理学部改組</p> <p>2004年 医学部改組</p> <p>2005年 法政学系改組</p> <p>2006年 経済学系改組</p> <p>2007年 教育学系改組</p> <p>2008年 音楽学系改組</p> <p>2009年 美術学系改組</p>																																			
備註	<p>※同一年の出来事は、表の下の順番に記述しました。</p>																																			

# 名古屋大学の歴史地図



## 名古屋大学 沿革図



一名古屋大学創立70周年（創基138周年）記念一

# 医学教育の曙から ノーベル賞まで

名古屋大学は、本年で創立70周年・創基138周年を迎えました。名古屋帝国大学として1939年（昭和14）に創立されてから70年、医学部の前身にあたる名古屋県仮病院・仮医学校が1871年（明治4）に設置されてから138年です。

これを記念する今回の展示では、明治維新後の西洋医学を普及する事業の東海地方における中心となった明治の初めから医科大学となるまで、そして名古屋帝国大学の創立をへて、相次いで関係者がノーベル賞を受賞した現在までの歴史を、写真パネルや実物資料（一部はレプリカ）、映像資料などを使って分かりやすく概観します。とくに創基の時代については、初公開の貴重な資料を展示します。

激動の時代に創立され、現在の総合大学としての地位を築くに至った名古屋大学の歴史と現状を、ぜひ展示会場で体感してみてください。

2009年10月

名古屋大学 博物館／大学文書資料室

# 源流—「河の学校」から鶴舞へ

今から138年前の1871年（明治4）、名古屋県は旧藩の評定所・奉行所跡に仮病院・仮医学校を設置しました。これが本学医学部の源流にあたり、本学ではこれを創基の年と位置づけています。

紆余曲折をへて、天王崎の地に落ち着いた愛知医学校・愛知病院は、東海地方に西洋医学や西洋医学教育を普及させる事業の中心となり、存続の危機を乗り越えて日本屈指の医学専門学校に成長しました。同時に、和洋折衷の特徴的な建物と堀川河岸にあったことから、「河の学校」と呼ばれるなど、人びとに親しまれました。

1914年（大正3）に現在も医学部のある鶴舞に移転したのち、20年に県立医科大学、31年（昭和6）に官立医科大学へと発展を遂げると、総合大学への夢を実現しようとの機運がいよいよ高まっていったのです。





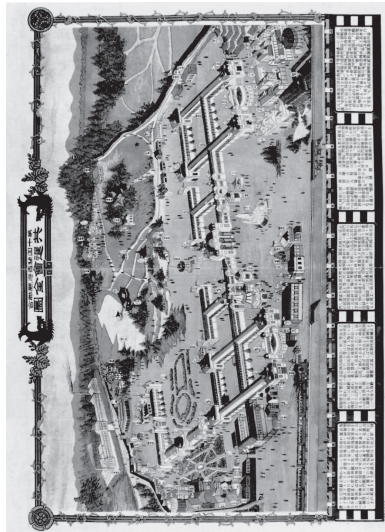
# 天王崎から鶴舞へ



院前地区（現院前町）の天王崎新校舎

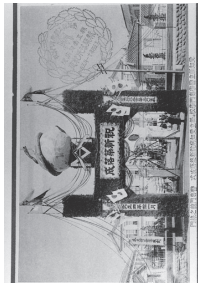
鶴舞移転当時の愛知医科大学専門学校、愛知病院

鶴舞公園の電ヶ池から撮影したものです。

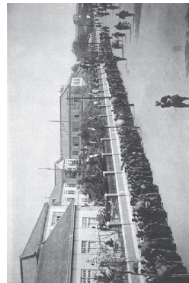


第100回関西西府県連合共進会全国（1910年）  
名古屋市政資料館所蔵

1909年（明治42）、大半が田圃であった土地を名古屋市が埋め立て、鶴舞公園を開園しました。その翌年、ここで名古屋開府300周年を記念して大規模な産業博覧会が開催され、3か月の会期に約260万人が来場しました。



新築落成記念式（1915年11月）で愛知医事正門前に架けられた緑門



愛知医科大学昇格記念展覧会当日、校門の前に並ぶ人々（1920年）



昇格記念展覧会の展示（眼科室）

# 鶴舞の医科大学



齋藤眞教授（外科）の臨床講義（名古屋医科大学）

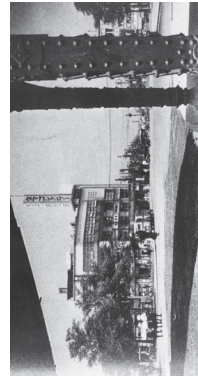
齋藤眞は、日本の脳神経外科のバイオニアトとして、大志を足跡を残しました。

「大阪朝日新聞」（1936年2月15日）→朝日新聞名古屋本社提供

名古屋医科大学は、レントゲン施設が充実していることで有名でした。



名古屋医科大学全景



名古屋医科大学付近

名古屋市は、「大名古屋」のスローガンの下、発展・膨張を続けた。1934年（昭和9）には人口が100万人を突破しました。鶴舞は市街地化が進んだ地域でした。



名古屋医科大学の図書館



愛知医科大学附属病院薬局投薬口

# 創立一名帝大けふ誕生

1939年(昭和14)4月1日、ついに名古屋、愛知、東海の人びとの長年の悲願である名古屋帝国大学が誕生しました。その創設費9百万円は、愛知県が全額負担しました。県の財政規模が4千5百万円の時代です。東山の広大な敷地も、地元の土地整理組合から無償で提供されました。

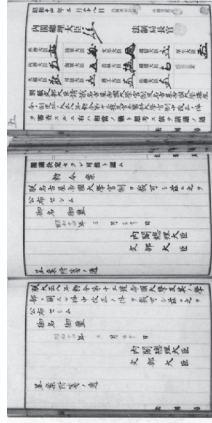
しかし、すでに2年前から日中戦争がはじまっております、名帝大の出発は多難でした。医学部と理工学部のみでの出発を余儀なくされ、建物も物資の不足で立派なものは難しく、ほとんどが突貫工事の木造でした。それでも、渋沢元治総長を中心に、学部増設の模索や東山のキャンパス構想の立案など、真の総合大学としての未来像が育まれていました。

そして1945年、名帝大は空襲によって鶴舞地区や西二葉地区の多くの焼失し、大きなダメージを負ったまま、新しい時代を迎えることになったのです。

# 名古屋帝国大学の誕生



名古屋帝国大学の誕生を報じる新聞記事(大阪朝日新聞、1939.4.2付夕刊)  
朝日新聞名古屋本社提供



名古屋帝国大学図書館所蔵 国立公文書館所蔵



名古屋帝国大学工学部庁舎と理工学部学生

創立当初の本部は、当時の名古屋市東区西二葉町(現在の東山明和高校付近)に置かれていました。1944年(昭和19)の末に東山地区へ移転しています。



総長室の渋沢元治総長

渋沢元治初代総長は、聖徳太子の十七条憲法の一節「和を以て貴しと爲す」を、大学全体の座右の銘として総長室に掲げました。近衛文麿前首相の揮毫によるものです。



# 初期の大学生生活



大学が空襲を借り入れた薪々寮で開かれた「総長懇談会」  
1942年(昭和17)からたびたび開かれ、総長のボケットマネーで豚鍋などを食べながら、教員と学生の意思疎通をはかりました。



附属医学専門部の学生と陸軍歩兵第6連隊(名古屋)の將兵  
附属医学専門部は、軍医の養成を目的として1939年に設置されました。1944年に設置された医学部附属医院分院(現在の名古屋市中区米4丁目)は、専門部専用の診療病院となりました。



第1回日本大学体育大会(昭和17年5月6日)

現在も毎年開催されている名阪戦(名古屋大学対大阪大学)は、1947年(昭和22)を第1回として始まっています。



松坂屋創業第15代伊藤次郎左衛門の別荘である湯田荘  
松坂屋創業第15代伊藤次郎左衛門の別荘である湯田荘には、アジアからの留学生のための寮舎がありました。写真には、名帝大の中国・タイ・モンゴルからの留学生と日本人学生などが写っています。

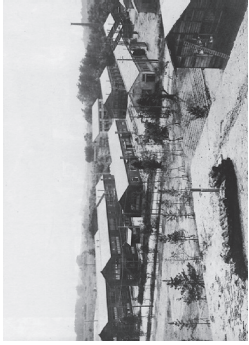


工学部電気学科の実験装置と学生たち(西二寮)



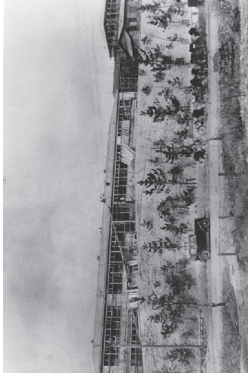
理工学部クイズメイキング  
(昭和11年卒業アルバム)

# 東山キャンパスの形成



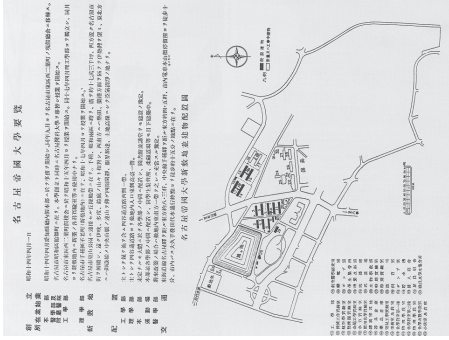
工学部の校舎

戦時下の物資不足のため、突貫工事の木造校舎でした。上の写真は、四ッ台通りをはさんだ理学部の側から撮影したものです。



建設中の理学部校舎(1942年)

現在の工学部8・9号館およびエコトピア科学研究所先端技術共同研究施設のエリアにあたります。



←名古屋帝国大学要覧

開学記念誌はかき(1943年発行)の包み紙の裏地に印刷されていたもの。



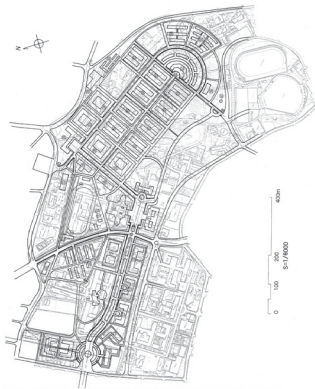
整地中の理学部校舎地



鏡ヶ池から見た理学部校舎(左)と工学部校舎(右)

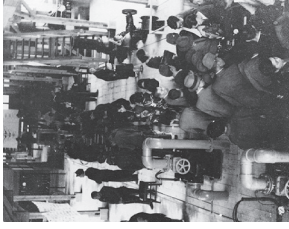
# 東山キャンパス計画

区画	用途	面積	備考
1	学舎	10,000	
2	講堂	5,000	
3	図書館	3,000	
4	学生宿舎	20,000	
5	教員宿舎	5,000	
6	運動場	15,000	
7	校舎	10,000	
8	校舎	10,000	
9	校舎	10,000	
10	校舎	10,000	
11	校舎	10,000	
12	校舎	10,000	
13	校舎	10,000	
14	校舎	10,000	
15	校舎	10,000	
16	校舎	10,000	
17	校舎	10,000	
18	校舎	10,000	
19	校舎	10,000	
20	校舎	10,000	
21	校舎	10,000	
22	校舎	10,000	
23	校舎	10,000	
24	校舎	10,000	
25	校舎	10,000	
26	校舎	10,000	
27	校舎	10,000	
28	校舎	10,000	
29	校舎	10,000	
30	校舎	10,000	
31	校舎	10,000	
32	校舎	10,000	
33	校舎	10,000	
34	校舎	10,000	
35	校舎	10,000	
36	校舎	10,000	
37	校舎	10,000	
38	校舎	10,000	
39	校舎	10,000	
40	校舎	10,000	
41	校舎	10,000	
42	校舎	10,000	
43	校舎	10,000	
44	校舎	10,000	
45	校舎	10,000	
46	校舎	10,000	
47	校舎	10,000	
48	校舎	10,000	
49	校舎	10,000	
50	校舎	10,000	
51	校舎	10,000	
52	校舎	10,000	
53	校舎	10,000	
54	校舎	10,000	
55	校舎	10,000	
56	校舎	10,000	
57	校舎	10,000	
58	校舎	10,000	
59	校舎	10,000	
60	校舎	10,000	
61	校舎	10,000	
62	校舎	10,000	
63	校舎	10,000	
64	校舎	10,000	
65	校舎	10,000	
66	校舎	10,000	
67	校舎	10,000	
68	校舎	10,000	
69	校舎	10,000	
70	校舎	10,000	
71	校舎	10,000	
72	校舎	10,000	
73	校舎	10,000	
74	校舎	10,000	
75	校舎	10,000	
76	校舎	10,000	
77	校舎	10,000	
78	校舎	10,000	
79	校舎	10,000	
80	校舎	10,000	
81	校舎	10,000	
82	校舎	10,000	
83	校舎	10,000	
84	校舎	10,000	
85	校舎	10,000	
86	校舎	10,000	
87	校舎	10,000	
88	校舎	10,000	
89	校舎	10,000	
90	校舎	10,000	
91	校舎	10,000	
92	校舎	10,000	
93	校舎	10,000	
94	校舎	10,000	
95	校舎	10,000	
96	校舎	10,000	
97	校舎	10,000	
98	校舎	10,000	
99	校舎	10,000	
100	校舎	10,000	



開学記念式典 (1943年5月1日)

この頃には、前年に工学部の第1回卒業生を送り出し、理学部の施設・設備も整備され、ようやく総合大学としての体裁が整いました。記念式典の際、数日にわたって工学部や理学部の施設が公開され、医学部では学術講演会や科学映画会が催されて、多くの市民が見学に訪れました。



一般公開された工学部水力実験室

名古屋帝国大学計画案 (1942年)、分析図  
木方十穂氏、河野彌一氏作図

東側全域に、医学部を鶴舞から移転させる計画がありました。本部から中央街路が西へ伸び、キャンパス西端でロータリーとなって、ここに正門を設ける構想です。下の1947年の航空写真を見ると、その構想の一部は実現されていたことが分かります。



1947年の航空写真 国土交通省国土地理院所蔵

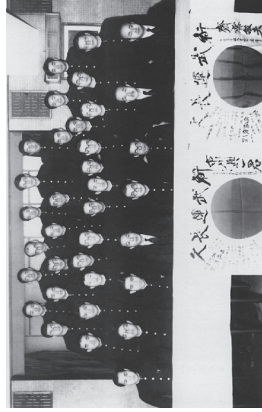
色が濃くなっている部分が当時の東山キャンパスです。現在の文系地区や博物館地区、運動場などの「山の上」地区は、まだ取得されていませんでした。鐘ヶ池も埋め立てられる前で、現在の2倍くらい面積がありました。

# 戦時下の名帝大



名帝大キャンパス構想模型 (1940~41年頃製作)

創立直後の名帝大が、東山キャンパスの将来構想を練るために島津製作所に発注して製作した、1/1000スケールの模型(高低差のみ1/100)です。現在、本部1号館の玄関に展示されています。



在学中に招いた工学部学生を送る



名古屋帝国大学医学部韓国隊の診療風景

医学部関係者からなる韓国隊が、無医村で診療奉仕をおこないました。



戦争遂行のために供出される医学部外堀の鉄柵  
中日新聞社提供



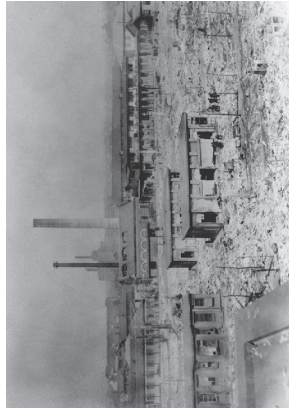
防空演習でヘルメット姿の医学部附属病院の看護婦たち (43年頃)

# 空襲による被害



空襲直後の医学部1

1945年3月における三度の空襲で、医学部は図書館を除いてほぼ全焼、医学部附属病院も約半分の建物が焼失しました。また同年5月の空襲により、西二葉の工学部校舎や東山の大学本部事務室・学生集所・理学部生物学教室・航空医学研究所などが焼失しました。

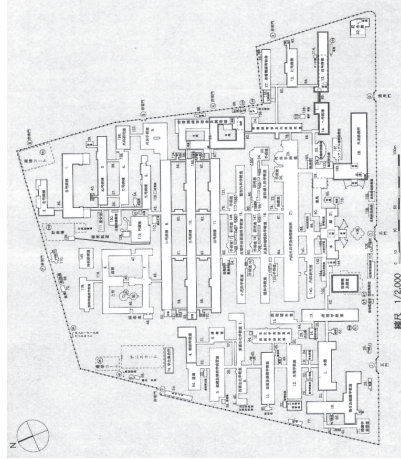


空襲直後の医学部2



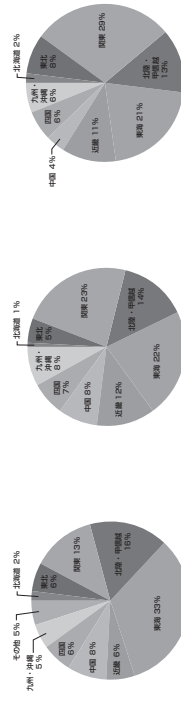
鶴舞キャンパス航空写真（1946年撮影）  
国土交通省国土地理院所蔵

色が濃くなっている部分が当時の鶴舞キャンパスです。まだ復興が進んでおらず、空襲の被害がよく分かります。左の方が、とくに被害が大きかった医学部エリアです。



名古屋帝国大学医学部及附属病院配置図  
木方十根氏作成

## 名古屋帝国大学生の出身地の割合（1942年）



※「その他」は、台湾・朝鮮・樺太・中支那・蒙古です。

現在の名大(2009年度入学者の約75%)に比べると、東海(愛知・岐阜・三重・静岡)出身者の割合がかなり少ないことが分かります。逆に、医学専門部は8割が東海出身であり、地元の軍医養成を担っていたことが明らかです。

臨時附属医学専門部

## 名古屋帝国大学の空襲被災状況（昭和23年4月1日調）

部局	被災年月日 (昭和20年)	所在地 (すべて名古屋市内)	建物坪数		焼失率 (%)
			戦災前	焼失	
医学部	3月12日・19日	昭和区鶴舞町	3,818	3,711	97.2
附属病院	3月25日	同上	12,623	6,474	51.3
附属図書館	同上	同上	451	0	0
附属医院分院	3月19日	中区新栄町	1,135	47	4.1
本理学部	5月14日	千種区不老町	657	497	75.6
航空医学部	同上	同上	1,777	219	12.3
航空研究所	同上	同上	458	99	21.6
職員宿舎	同上	同上	46	46	100
工学部	同上	東区西二葉町(仮校舎)	6,418	4,831	75.3
学生宿舎	同上	および千種区不老町(1943年1月28日より移転中)	0	0	0
教官宿舎	5月17日	東区長久業町	88	88	100
合計		昭和区広瀬町	27,472	16,012	58.3

戦災を受けなかった名古屋市内外の附帯建物・施設は除きます。  
 (昭和二十年五月十四日空襲被害状況調査「昭和二十年五月十七日空襲被害状況調査」昭和二十年五月文部省通達級「および「昭和二十三年名古屋大学概況」より作成)

## 新制名古屋大学の出發

敗戦後の混乱のなか、名帝大の復興は大変な難事でした。空襲で焼失した校舎、戦時中の仮校舎の再建、本格的な総合大学となるための学部の増設や諸学校の包括、さらに新制大学への移行という、一つ一つですら大変な事業を、ほぼ同時に進めなければならなかったのです。地域から惜しみない支援は、その大きな力となりました。

そして、1949年（昭和24）5月31日、新制大学としての名古屋大学が設置されました。当初は各地にキャンパスが分散していましたが、それも1966年の農学部の東山移転によって学部の終結が完了し、60年に完成した豊田講堂を中心とする東山キャンパスの基礎がほぼできあがりました。

しかしこの時代は、1959年の伊勢湾台風に59～60年のいわゆる安保闘争、60年代後半の大学紛争と、本学が大きく揺れた時代でもあったのです。

## 分散するキャンパス



名城キャンパス（1960年当時） 中日新聞社提供

左の写真上部の旧陸軍歩兵第6連隊兵舎跡に、本部や附属図書館、文学部、教育学部、法学部などがありました。文学部の号館として使われていた建物は、犬山市の博物館明治村に移築されています。

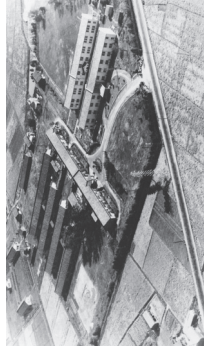


旧第6連隊兵舎（旧文学部3号館） 博物館明治村提供



桜山キャンパス（1959年当時）

包括した名古屋高等学校の施設を引き継ぎ、経済学部と学生寮（喫茶寮）が運搬されました。現在は、名古屋市立大学川邊キャンパスになっています。



安城キャンパス（1954年頃）

愛知学芸大学（現在の愛知教育大学）安城分校施設を引き継ぎました。現在は、安城市総合運動公園になっており、農学部同窓会による記念碑があります。



稲高キャンパス（1960年頃）

空襲によって多くの建物が焼失してしまった鶴舞地区ですが、医学部学会などの支援を得ながら、急遽に復興してまいりました。現在のキャンパスの形に比べると、北東部の一角がまだ取得されていません。

## 東山キャンパスの復興

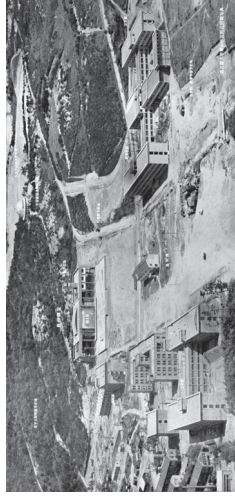


1954年(昭和29)当時の東山キャンパス 中日新聞社提供



四ツ谷通3丁目交差点付近から見た工学部 (1953年頃)

## 豊田講堂の建設と 東山キャンパスへの集結



豊田講堂竣工記念パンフレット (1960年)



「名古屋大学新聞」(1956年)



勝沼前総長・法沢初代総長・松坂総長 (1961年)

講堂の建設は、法沢総長の時代からの念願でした。第2代の田村総長は、新制移行の直前に現職のまま亡くなっています。



「名古屋大学要覧」(1960年度)

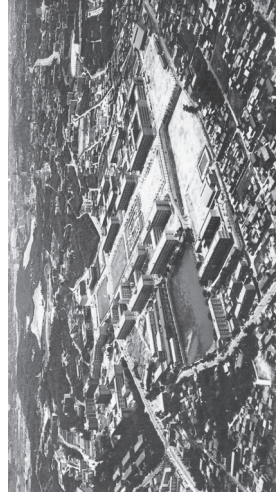
Uには「農学部」が入るべきところですが、安城市との関係で、あえて空欄にしているものと留われます。



理学部化学科新制第4回卒業生(1956年)と「化学教室」の看板



理学部に保存されている、珍しい銅版写真を現像したものです。当時の看板も、理学部に保存されています。



6学部および教養部が集結した後の東山キャンパス (1970年)

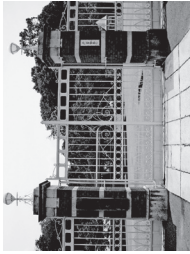
## 東山移転前の教養部



瑞穂キャンパス（教養部）正門



博物館明治村（名古屋市）正門  
博物館明治村提供



瑞穂キャンパスは、第八高等学校の施設を引き継いだものです。現在、その正門は、博物館明治村の正門として使用されています。



教養部の化学実験



1964年（昭和39）に東山へ移転する直前の瑞穂キャンパス。現在は、名古屋市立大学山の畑キャンパスになっています。



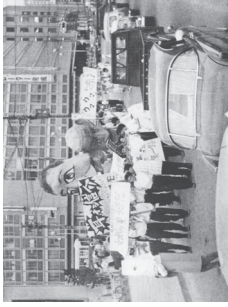
豊川分校（教養部）

当初の教養部は、瑞穂分校と、包摂した岡崎高等学校の校舎（豊川分校）に分かれていました。



豊川の教養部学生たち（1951年）

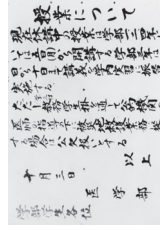
## 激動—揺れる名古屋大学—



名大祭仮行列（1960年）



日米関係改定反対デモ（1960年度医学部卒業アルバムより）



伊勢湾台風後の医学部掲示（1959年）



救護物資を運ぶ学生たち



被災者救護活動

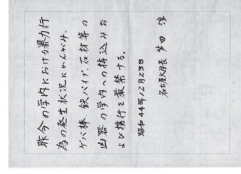
献身的な救護活動をおこなった名大の教職員と学生に対し、愛知県議会から感謝決議がなされました。



名大全学総決起集会



封鎖される教養部



当時の掲示



豊田講堂裏、本館前 中日新聞社提供

1967年（昭和42）のいわゆる医学部紛争に端を築いた名大の大学紛争は、1969年には東山キャンパスにも本格的に波及しました。

## 初期の学生生活



「コンパ」(瑞穂キャンパス、1955年)



鶴岡の学生ホールで食事をする学生たち(1955年前後)



医学部の授業風景(1966年)



1964年(昭和39)に集学した瀧川秀樹博士(前列左から2人目)と理学部物理学科の学生たち

前列右から1人目の坂田昌一教授は、世界的に著名な物理学者であり、このたびノーベル賞を受賞した益川博士・小林博士の指導教員でした。



第10回名大祭(1969年)のパンフレット表紙



石浜ストープで睡をとる教育学部学生たち(1963年頃)



東山キャンパス内の生協本部

## 名古屋大学の発展

創立期、復興期の激動の時代をへて、本学は日本の基幹的総合大学として、さらに発展を続けました。

1970～80年代には、全学的な研究組織再編にともなって、現在につながるセンターが次々に設置されました。90年代に入ると、いわゆる大学院重点化により、学部が大学院中心の組織に改編されるとともに、独立大学院が相次いで設置されました。大学紛争後の大きな課題として、議論と改革が続けられた教養教育も、90年に入って教養部の廃止と4年一貫教育への移行という形で大きな節目を迎えました。

創立以来の「自由闊達」な学風に加えて、80年代からは留学生の受け入れが進み、国際色豊かな大学となっていきました。大学の景観も、学生生活も、ずいぶん様変わりしました。それでも、学生たちがそれぞれの夢を持って集まり、お互いに切磋琢磨し合っている場であることに変わりはありません。

# 教養教育の改革



「4年一貫教育検討委員会」の答申発表

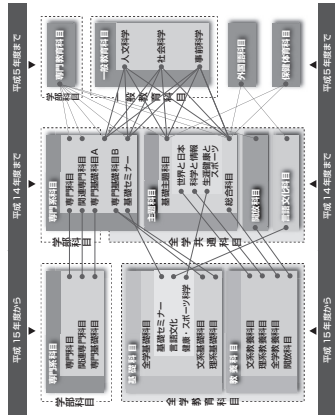


「教育と研究に関する大学問題検討委員会(学長顧問組織)の動向を報じる」(名古屋大学新聞) (1975年4月)



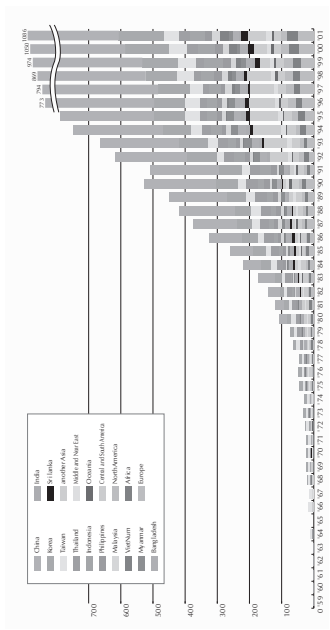
現在の全学教養棟(旧教養部)

4年一貫教育の理念を実現するさまざまな取り組みや検討がおこなわれたのち、1993年(平成5)には教養部を廃止し、その翌年から名実ともに4年一貫教育が始まりました。そして2001年(平成13)には、学内措置として教養教育院を設置しました。全学の協力教員により講義がおこなわれています。



全学教育科目の枠組みの変遷

# 国際色豊かな大学へ



名古屋大学の受け入れ留学生数(国・地域別)

戦後の名古屋大学による留学生受け入れは、早く微増もしくは横ばいの状態が続きましたが、日本が当時唯一の先進国としての地位を確立すると、1980年代から急増していきました。多くの国々から留学生を受け入れましたが、中心になっているのはアジア諸国、とりわけ中国と韓国で、この傾向は現在も変わっていません。現在では、1300人以上の留学生を受け入れており、これは全学生数の約8%という高い割合です。



インターナショナル・レジデンス(国際交流会館、1982年竣工)



工学研究科の留学生特別コース開設(1987年)



留学生懇親パーティー(1988年)



留学生センター(2001年竣工)



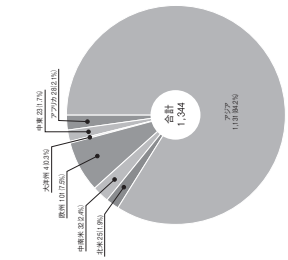
国際交流プログラム「スモールワールド・コーヒョーアワー」にて



# 留学生の受け入れと海外留学 (平成21年5月現在)

学びの場を世界に広げて  
一海外留学する名大生

留学国 (旧称名)	滞在別人数				在留人数		
	交換留学	短期留学	長期留学	合計			
米 国	5	61	35	2	484	241	24
オーストラリア	1	16	2	19	13	6	
英 国	2	7	4	13	6	7	
ドイツ	3	5	3	1	12	1	1
フランス	3	2	6	1	7	4	
カナダ	3	5	5	8	3	5	
中 国	1	6	1	8	5	3	
韓 国	1	4	1	4	5	5	
イタリア		2	1	3	3	3	
デンマーク			3	3	3	3	
インドネシア		1	1	1	1	1	
オーストリア		1	1	1	1	1	
オランダ		1	1	1	1	1	
カンボジア			1	1	1	1	
スウェーデン			1	1	1	1	
ルベク			1	1	1	1	
ポルトガル			1	1	1	1	
チリ			1	1	1	1	
ブルガリア			1	1	1	1	
バングラ			1	1	1	1	
フィリピン			1	1	1	1	
ブラジル			1	1	1	1	
ペルー			1	1	1	1	
マレーシア			1	1	1	1	
韓 国	1	17	20	92	116	148	73
合 計							

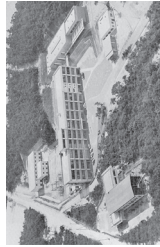


地域別の留学生数

留学生数のうっかわり

70以上の国・地域から1,300人以上の留学生が学んでいます。  
名大生も海外で学んでいます。

# 研究所・センターの設置 (～1990年)



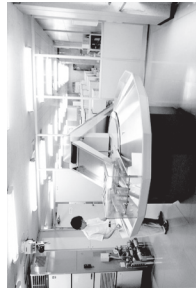
プラズマ研究所 (1961年設置)  
1989年に文部省核融合科学研究所に発展



硝子研究所 (1946年設置)  
写真は蒸無重量実験



空電研究所 (1949年設置)  
現在、大圏地球観測研究所  
写真はパララボラアンテナ



大型計算機センター (1971年設置)  
現在、情報基盤センター



総合保健体育科学センター (1975年設置)  
写真は、身体測定を受ける瀬古利彦選手



情報処理教育センター (1980年設置)  
現在、情報基盤センター



アイトープ総合センター (1976年設置)



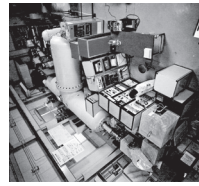
水圏科学研究所 (1976年設置)  
現在、地球水循環研究センター  
写真はレーザーレーダー



先端技術研究センター (1988年設置)  
現在、エコトピア科学研究所  
写真はクリーンルーム



省資源エネルギー研究センター (1982年設置)  
現在、エコトピア科学研究センター



年代測定資料研究センター (1990年設置)  
現在、年代測定総合研究センター  
写真はタンデム加速器

# 大学院大学として



● 環境学研究所 (2001年設置)



● 多元数理科学研究科 (1995年設置)



1990年代以降、5つの独立研究科が創設され、さらに既存の8学部も、いわゆる大学院重点化により、2000年(平成12)までに、大学院を中心とする組織に改編されました。

- 文学研究科
- 教育発達科学研究科
- 法学研究科
- 経済学研究科
- 理学研究科
- 医学系研究科(徳島キャンパス)
- 工学研究科
- 生命農学研究科



● 情報科学研究科 (2003年設置)  
● 人間情報学研究室 (1992~2003年)



● 国際開発研究所 (1991年設置)



● 国際言語文化研究科 (1998年設置)

# 学生生活からキャンパス・ライフへ



1966年(昭和43)頃



クラス  
写真  
(法)

2005年(平成17)



食堂  
(文系)

1970年(昭和45)頃



2009年(平成21)



生協  
購買

1979年(昭和54)年



2009年(平成21)



仮装  
行列

1967年(昭和42)頃



2008年(平成20)

## 現在の景観へ



医学部附属病院新棟 (1999年完成)



医学部保健学科棟 (2006年竣工、大幹キャンパス)



変わらぬ景観もあります



文学総合館 (2002年竣工)  
1~2Fには、統合された文芸事務部が入っています。



旧電子情報館(2003年完成)と  
地下鉄3番出口



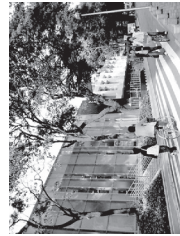
野佐記念物質科学研究館  
(2003年竣工)



2007年竣工の改修により全面改装された  
豊田講堂ホール



ファーマリーマート名古屋大学店  
(2006年オープン)



フォレスト(書店とカフェ)と  
ダイニングフォレスト  
旧理茶室です。



「山の上」グラウンド  
(2006年にフィールドを人工芝化)



国際講堂 (2002年竣工、旧唯晴寮)

## 21世紀に羽ばたく名古屋大学

20世紀最後の年である2000年(平成12)、本学は学術憲章を制定し、21世紀に向けたその学術活動の基本理念を、全国の大学に先駆けてかかげました。2004年に国立大学法人となった本学では、学外の有識者の参画を得ながら、その実現に向けた積極的な取り組みを進めつつあります。

世界最先端の研究を推進し、「勇気ある知識人」を育成して、日本のみならず広く世界に貢献すること、これには教育研究体制の充実とともに、学外との積極的な連携が不可欠です。本学では、産学官の連携を強化するための施策、さらに世界の大学や企業との連携・交流を積極的に推し進めています。

また国立大学法人として、社会への説明責任を果たしつつ、みなさまとともに歩む大学をめざして、社会へのさまざまな貢献・連携事業をおこなってまいります。

# 国際社会とともに



国際学術コンソーシアム (AC21) の設立 (2002年)

AC (Academic Consortium) 21の本部は名古屋大学に置かれ、高等教育発展のための国際協力事業をおこなっています。



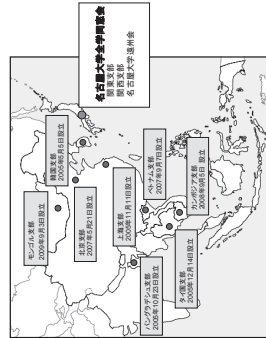
日本法教育研究センター (ベトナム) 開所式 (2007年)

モンゴル、ウズベキスタン、カンボジアにも設置され、現地の大学と協力して、日本法および日本語の教育にあたっています。



第1回インターナショナルアドバイザリーボード (2006年)

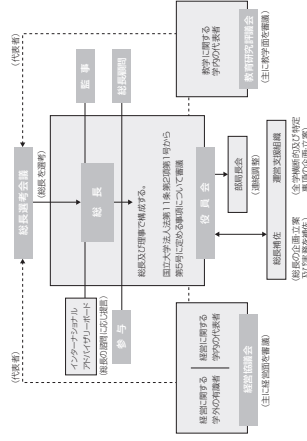
International Advisory Board (国際諮問委員会) は、ノーベル賞受賞者3名を含む国内外の著名な学識経験者7名からなる総長の諮問機関です。



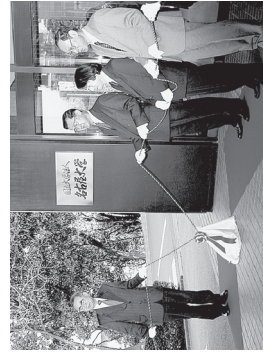
アジア諸国に広がる全学同窓会支部

# 国立大学法人名古屋大学

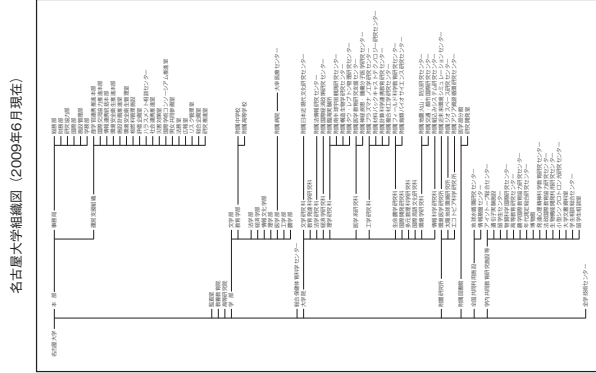
名古屋大学運営組織 (2009年9月現在)



2004 (平成16) 4月1日から、名古屋大学は「国立大学法人」として再出発しました。これは、独自性を発揮できる一方、より大きな責任を負うことでもあります。また、運営組織も役員会を中心とするもの大きく変わり、学外の有識者も大学経営に参画するようになりました。



看板除幕セレモニー (2004年4月1日)



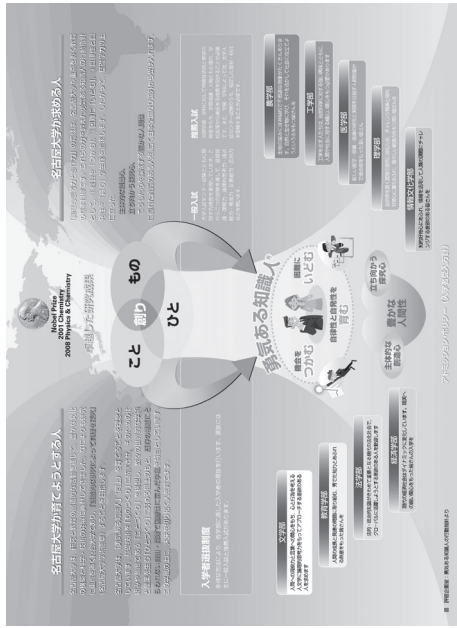
名古屋大学組織図 (2009年6月現在)



第1回経営協議会 (2004年4月3日)



# 名古屋大学がめざすもの



## 名古屋大学術憲章

名古屋大学は、学問の府として、大学固有の使命とその歴史的、社会的使命を確認し、その学術活動の基本理念をここに定める。  
 名古屋大学は、自由闊達な学風の下、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする。とりわけ、人間性と科学の調和的発展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学とともに挑戦し入れた高度な研究と教育を実施する。このために、以下の基本目標および基本方針に基づき諸活動を展開し、基幹的総合大学としての責務を持続的に果たす。

- 1. 研究と教育の基本目標**
  - (1) 名古屋大学は、創造的な研究活動によって真実を探究し、世界屈指の知的成果を産み出す。
  - (2) 名古屋大学は、自然性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる。
- 2. 社会的貢献の基本目標**
  - (1) 名古屋大学は、先進的な学術研究と、国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成とを通じて、人間の福祉と文化の発展ならびに世界の発展に貢献する。
  - (2) 名古屋大学は、その立地する地域社会の特性を基とし、多面的な学術研究活動を通じて地域の発展に貢献する。
  - (3) 名古屋大学は、国際的な学術連携および留学生教育を進め、世界とアジア諸国との交流に貢献する。
- 3. 研究教育体制の基本方針**
  - (1) 名古屋大学は、人文と社会と自然の諸現象を統一的立場から研究し、現代の諸問題に応え、人間性に立脚した新しい価値観や知識体系を創出するための学術体制を整備し、充実させる。
  - (2) 名古屋大学は、世界の知的伝統の中で培われた知的遺産を正しく継承し発展させる教育体制を整備し、高度で革新的な教育活動を推進する。
  - (3) 名古屋大学は、活発な情報発信と人的交流、および国内外の諸機関との連携によって学術文化の国際的拠点を形成する。
- 4. 大学運営の基本方針**
  - (1) 名古屋大学は、構成員の自律性と自発性に基づき探究を奨励し、学問研究の自由を保障する。
  - (2) 名古屋大学は、専攻員が、研究と教育に関与する機会と目標および評価原則の策定や実行に、それぞれの立場から参画することを求める。
  - (3) 名古屋大学は、構成員ならびに管理運営に関して、主体的に点検と評価を遂行するとともに、他者からの批判的評価を積極的に求め、開かれた大学を目指す。

名古屋大学は、2000年(平成14)に「名古屋大学術憲章」を全国に先駆けて制定し、「自由闊達」で国際性に富んだ学風の下、知と創造の拠点として、世界水準の卓越した研究成果を上げるとともに、「勇気ある知識人」を広く社会に送り出すことを目標に掲げています。

# 産業への貢献—産学官連携の推進—



赤崎記念研究館 (2006年竣工)

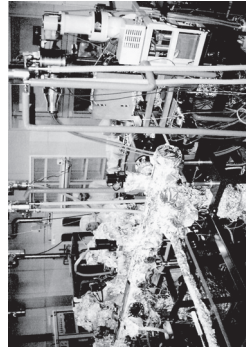


インキュベーション施設 (2002年竣工)

ここには、産学官連携推進本部が置かれています。  
 青色発光ダイオードを発明開発した、赤崎勇特別教授の業績を顕彰するとともに、本学における画期的な科学的な科学技術研究を推進し、広く社会に貢献するために建設されました。隣接するインキュベーション施設およびベンチャービジネスラボラトリーとともに、本学の産学官連携ゾーンを形成しています。



テクノフェア2008



ベンチャービジネスラボラトリーのクリーンルーム



第3回予防早期医療創成プロジェクトシンポジウム (2009年)



第4回名古屋大学東洋フォーラム (2006年)

# 名古屋大学と社会連携



第1回名古屋大学ホームカミングデー(2005)



トヨタ自動車によるF1カーの展示  
(第1回ホームカミングデー 2005)



本のリユース市  
(第4回ホームカミングデー 2008)



博物館「ミクロの探検隊」



大学文庫資料館(豊田講堂のあゆみ)  
(豊田講堂改修竣工式)



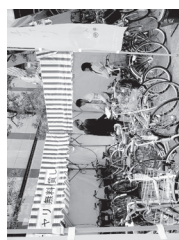
名古屋大学全学同窓会設立総会(2009)



災害対策室の中部・沖地震への支援活動  
動に対する感謝状贈呈式



「古紙・紙ごみ再資源化システム」スタート  
(2000)



「名チャリ」プロジェクト

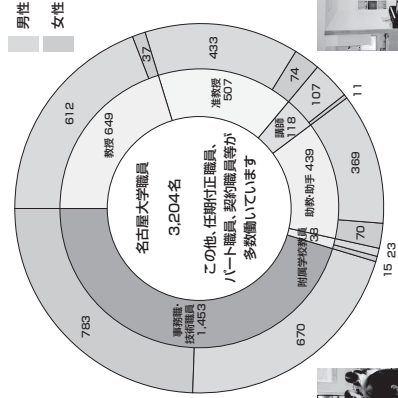


下宿用品リユース市

# 働きやすい職場をめざして

名古屋大学には3,200人以上が働いています。

## 職員のうちわけ(外円)とそれぞれの男女比(内円)



※平成21年5月1日現在

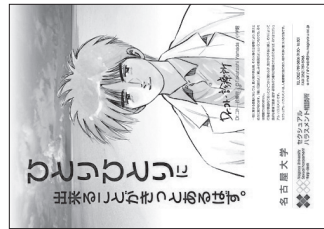


こすもす保育園児の博物館見学会

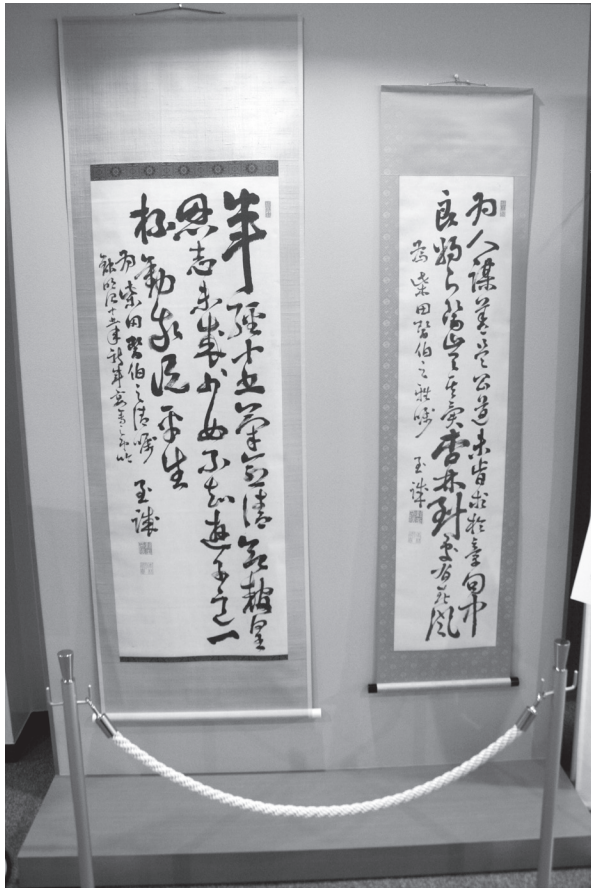


学童保育所ホビンスアフタースクール

名古屋大学は、国立大学の中で女性教員の割合が高い大学です。それでも11%余りと、まだ低い数字です。名古屋大学では、男女共同参画室を設置し、「女性教員比率向上のためのポジティブアクション」を教育研究評議会が決定するなど、さまざまな取り組みをおこなっています。「こすもす保育園」や日本の大学で初めての学童保育所「ホビンスアフタースクール」の設置もその例です。



地位を利用した教育の場や職場における嫌がらせ(アカデミックハラスメントやパワーハラスメント)や性的嫌がらせ(セクシュアルハラスメント)は人格や人権の侵害であり、民主的な教育・研究・労働環境とは相容れないものです。名古屋大学では、講習などによってハラスメント発生を未然に防ぐ対策を講じつつ、被害者の意向やプライバシーに配慮した相談体制を充実して問題解決をはかっています。



## 後藤新平自筆書掛軸【複製】

原物所蔵：柴田光子氏（左）／柴田義守氏（右）

愛知医学学校長時代（1881～83）の後藤新平が自ら揮毫して、同校の教員であった柴田邵平に贈ったものです。

後藤新平（1857－1929）は、近代日本を代表する官僚・政治家の一人ですが、そのキャリアは愛知医学学校からはじまりました。1876年（明治9）に就職し、その後24歳で校長兼病院長となった後藤は、さまざまな改革を断行して、医学学校発展の基礎を確立しました。「板垣死すとも自由は死せず」で有名な、岐阜の自由党総理板垣退助遭難事件で、後藤院長が治療に駆けつけたのもこの頃のことです。

この書を贈られた柴田邵平（1825－1898）は、尾張国で育ち、京都や江戸で西洋医学を学んだ後、1873年（明治6）に愛知県仮病院の当直医となり、翌年には医学学校創立係に任命されて、医学学校の草創に深く関わりました。その後も教員として若き後藤校長を支えています。左の書の奥書きには、「明治十五年」の「新年宴会」で後藤が柴田のために即興で詠んだものを献じたとあり、二人の親密さがうかがえます。

近年、邵平の曾孫にあたる柴田義守氏から約1千点の関係資料が名古屋大学大学文書資料室に寄贈され、一般公開されています。

為人謀善是公道 未肯求於章句中

良將良医豈其異 杏林到处有花風

人の為に善を謀るは是れ公道、未だ肯て章句の中に求めず、  
良將良医豈に其れ異ならんや、杏林到る処花風あり。

為柴田医伯之雅囑 至誠 印（新平印信） 印

柴田医伯の雅囑の為にす

※掛軸の裏書に「通信大臣後藤新平男ノ書」とあることから、後藤が通信大臣の時代（一九〇八～一三年にかけて）に書を掛軸にしたものと推測されます。

年経十五気愈清 欲報皇

恩志未成 少女不知遊子意 一

杯勸我説平生

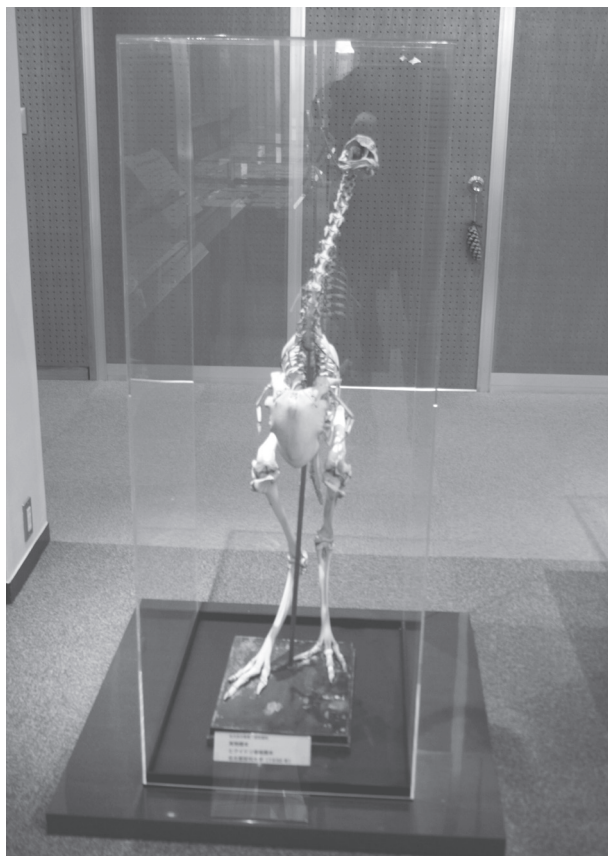
年経ること十五、気愈々清し、皇恩に報いんと欲すれども  
志未だ成らず、少女知らず遊子の意、一杯我に勧め平生を説く。

為柴田医伯之清囑

献明治十五年新年宴会之即吟 至誠 印（新平印信） 印

柴田医伯の清囑の為に明治十五年新年宴会の即吟を献ず





展示ケース 1

名大史の教育・研究資料

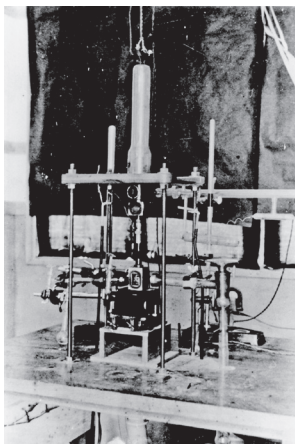
## 気体電子回折装置

### 上田良二(電子回折)

固体電子回折の専門家である上田は1942年(昭和17)に名古屋帝国大学に着任しています。1943年に着任した森野米三の立体化学の研究のために気体電子回折装置を4台自作し、提供しました。展示品は気体電子回折装置の一部分です。右の写真は一号機のものでされています。

上田はその後、超高圧電子顕微鏡の研究・開発をリードしました。また名古屋大学の工作室の充実に努めました。

\*常設展示の「電子回折装置」もご覧ください。



展示ケース 2

名大史の教育・研究資料

## Langカメラ X線回折顕微装置

加藤範夫(X線回折)

展示品は加藤がハーバード大学でLang博士と開発したX線回折計の原型です。加藤は1946年(昭和21)に理学部助手になり、1961年に工学部教授に昇任しています。この間、1957年にハーバード大学のリサーチフェローになっています。この装置は古いスペクトロメーターにLangカメラ用の試料台を後から取り付けています。残念ながらフィルムカセットは残っていません。この装置により世界で初めて、X線におけるベンデル干渉縞が観測されました。X線回折とはX線で物質の構造解析、物質の特徴の成因を解明する学問です。ベンゲル干渉縞とは結晶の欠陥がなくなり完全性が高くなった際に観測されるX線による干渉効果です。この装置は加藤と共に名古屋に持ち帰られました。加藤はその後、名古屋大学に超強力X線発生装置を導入するなどX線回折研究をリードしました。



展示ケース 3

名大史の教育・研究資料

## トランジスタ

有住徹弥(半導体)

神戸工業の有住チームにより国産トランジスタを使ったラジオが発表されたのは1954年(昭和29)1月です。

(ソニーがトランジスタラジオの試作に成功したのは1954年6月)

その後、有住は電子工学科の教授として1959年に名古屋大学に着任しました。有住にスカウトされた赤崎 勇は後年、青色発光ダイオードを創出します。「先生の研究、教育の基本姿勢は、常に基礎現象を学理的に追求し、深い理解に基づいてそれを応用まで展開するというものである。」と赤崎は有住の思い出を語っています。

展示品は1958年頃の神戸工業製トランジスタ4本(矢印)を使ったラジオです。(ケース、スピーカー等はシャープ製を利用しています)1959年9月の伊勢湾台風のさい、「停電でニュースの聞けなかった夜半に、このトランジスタラジオのおかげで住宅の皆さまはニュースを聞くことができました」と文江夫人は当時を振り返っています。



展示ケース 4

## 伊藤圭介編『錦窠植物図説』第87卷(附属図書館蔵)

名古屋大学附属図書館が所蔵する144冊の『錦窠植物図説』の一つで、「ヒツツバダコ譜」と題され、日本では東海地方と対馬にしか自生しないヒツツバダコ(一つ葉田子) *Chionanthus retusus* Lindley et Paxton, 1853についての情報が冊子としてまとめられている(圭介は「ヒツツバダコ」と表記)。綴じこまれている写生図(パネル)は圭介が描いたものではないと思われる。展示されているページは、おそらく圭介自身の手になる印葉で、圭介の筆跡で「栗本より来ルヒツツバダコ」と添えられている。「栗本」とは、栗本鋤雲(じょうん)のことで、医学や本草学を修め、幕末には外国奉行や函館奉行を務め、明治維新後は報知新聞主筆。自宅の庭のヒツツバダコの花が咲いたので送るとの栗本の手紙(詩箋に朱筆でしたためられている、パネル)や、鋤雲の質問に答えて実などについて考察した圭介による返信の控えも、この「ヒツツバダコ譜」に貼りこまれている。



栗本鋤雲から贈られたヒツツバダコの写生図

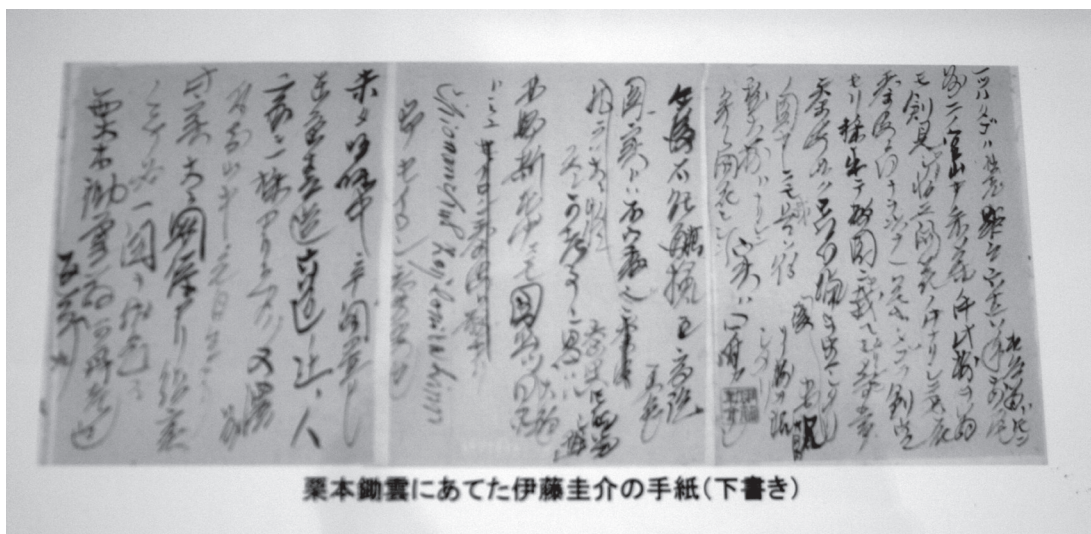
展示ケース 5-①



ヒツツバダコの写生図

展示中の図説の別のページに綴じ込まれており、「伊藤圭介」印がおさっていますが、筆致から見て圭介自身の作ではなさそうです

展示ケース 5-②



栗本鋤雲にあてた伊藤圭介の手紙(下書き)

展示ケース 5-③

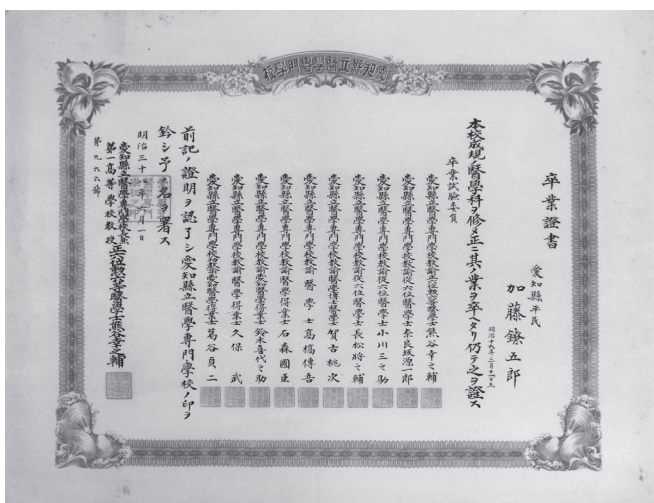


栗本錦雲から伊藤圭介への手紙  
詩箋に朱筆でしたためられています

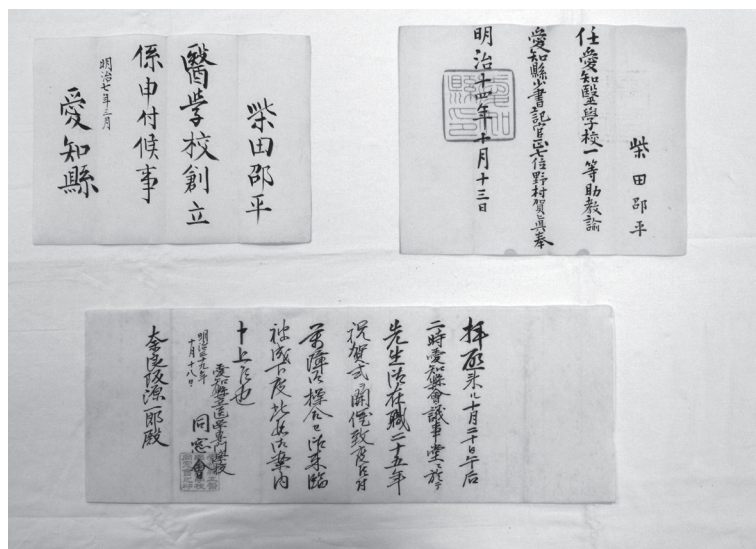
展示ケース 5-④



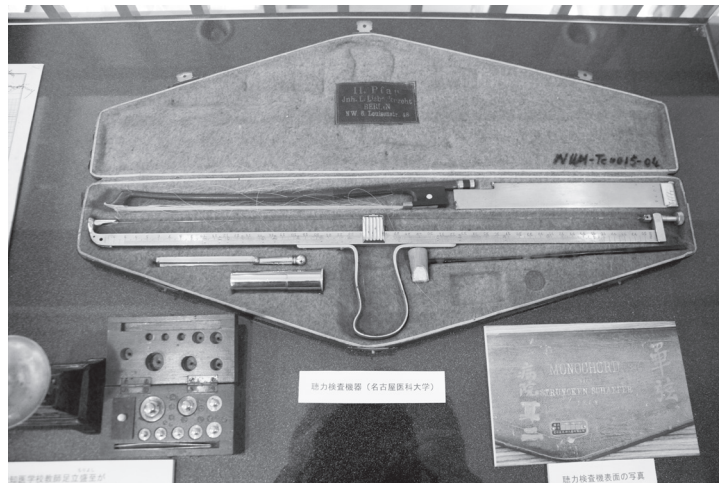
展示ケース 6



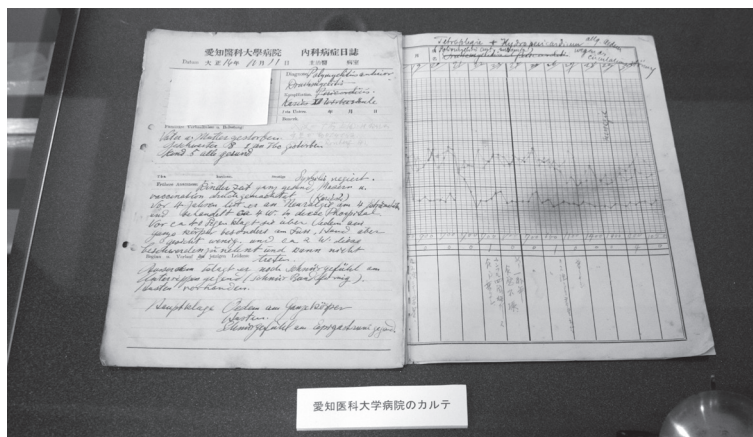
展示ケース 7-①



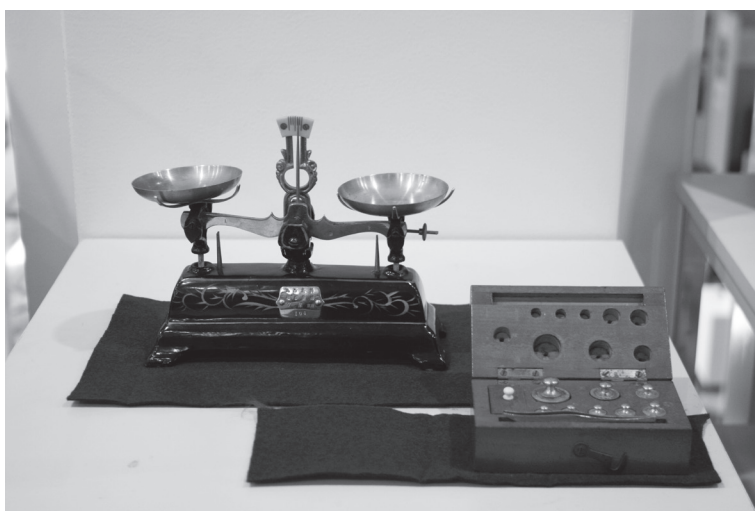
展示ケース 7-②



展示ケース 8-①



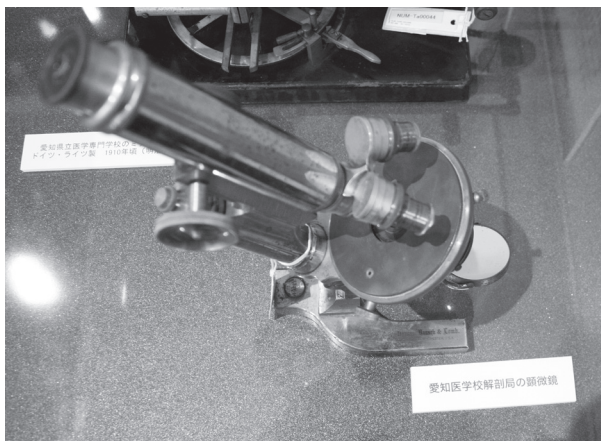
展示ケース 8-②



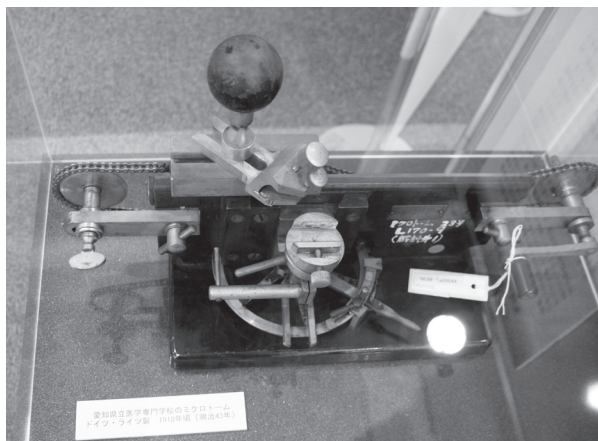
展示ケース 8-③



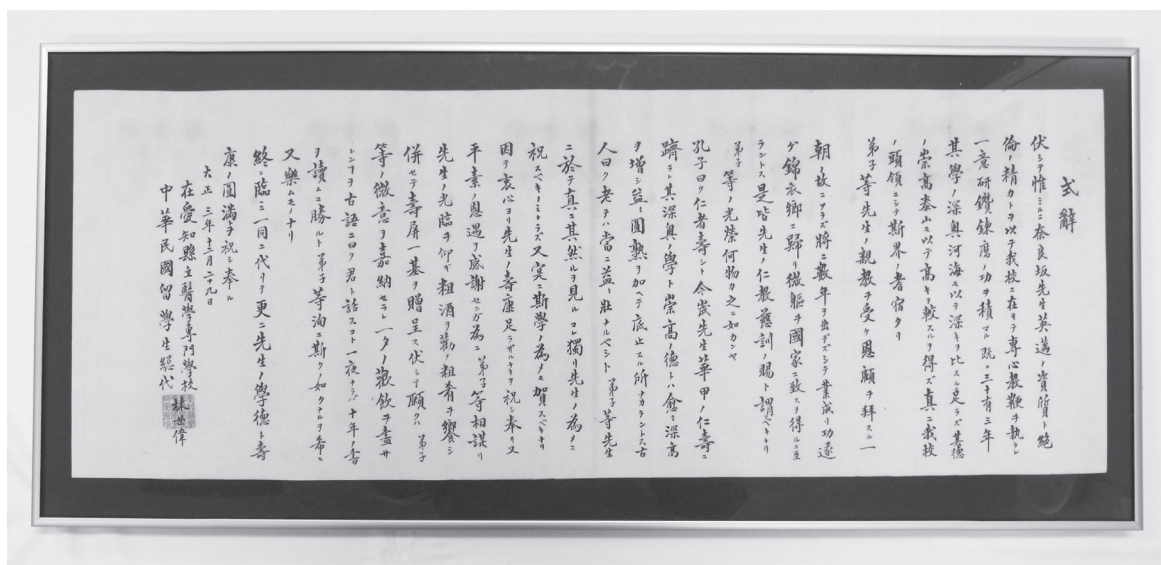
展示ケース 8-④



展示ケース 9-①



展示ケース 9-②



貼りパネル (留學生総代式辞)

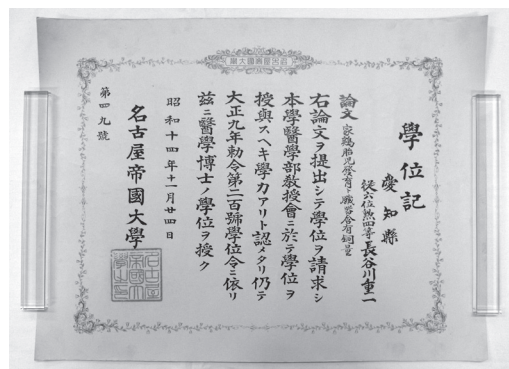


奈良坂源一郎(2列目中央)と中華民国の留学生たち

奈良坂の花甲(60歳)を祝って、留学生たちが酒宴を開きました。この時、上の感謝状とともに写真に写っている屏風が贈呈されました。奈良坂の右下が総代の林世偉です。



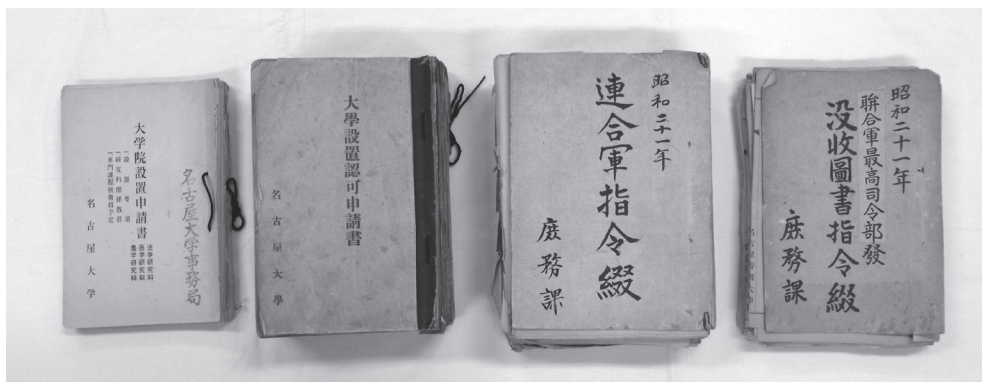
展示ケース 10-①



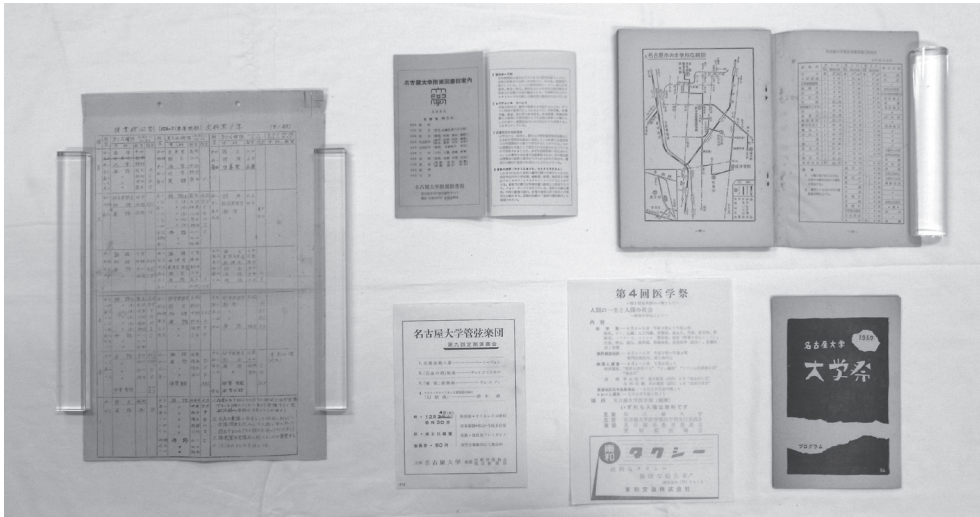
展示ケース 10-②



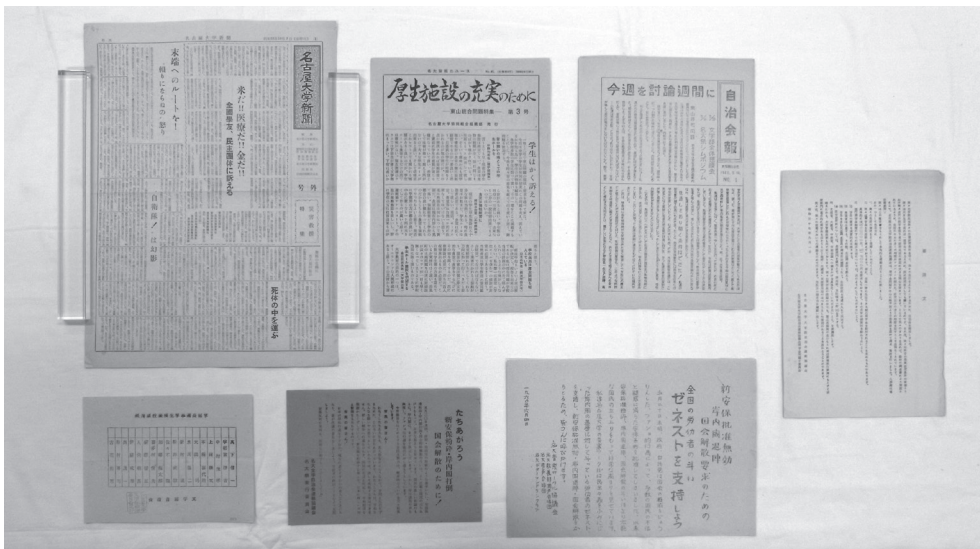
展示ケース 11



展示ケース 12



展示ケース 13



展示ケース 14



ケース展示等一覧

展示ケース番号等	展示品名(題目)等	説明文等
専用展示台	後藤新平自筆書掛軸〔複製〕 1882(明治15) 原物=柴田光子氏所蔵	
専用展示台	後藤新平自筆書掛軸〔複製〕 年不詳 原物=柴田義守氏所蔵	
1	ヒクイドリ骨格標本 博物館所蔵	名大史の教育・研究資料 実物標本 ヒクイドリ骨格標本 名古屋医科大学(1936年)
2	気体電子回折装置 上田良二(電子回折)博物館所蔵	
3	ラングカメラ X線回折顕微装置 加藤範夫(X線回折)博物館所蔵	
4	トランジスタ 有住徹弥(半導体)博物館所蔵	
5-①	伊藤圭介編『錦窠植物図説』第87巻 附属図書館所蔵	
5-②	ヒトツバタゴの写生図〔ボードへの印刷〕	展示中の図説の別のページに綴じ込まれており、『伊藤圭介』印がおさされていますが、筆致から見て圭介自身の作ではなさそうです。
5-③	栗本鋤雲にあてた伊藤圭介の手紙(下書き)	
5-④	栗本鋤雲から伊藤圭介への手紙	詩箋に朱筆でしたためられています。
6	『老烈氏講義 皮膚病論一斑』 1880年(明治13)	1879年6月4日から13日まで行われた、時間割表に載っていない、お雇い外国人ローレツの短期集中講義の講義録です。
6	山田良淳「建言」 1880年(明治13)	愛知病院種痘係の山田良淳が、種痘(天然痘の予防接種)が普及しないことの原因を種痘技術の不足にあるとうったえ、それを改善すべきことを求めた意見書です。種痘の普及は、西洋医療の普及をめざした当時の日本の衛生行政における、最も大きな事業の一つでした。
6	『医事新報』第14号 1880年(明治13)	ローレツの指導で、愛知県公立医学校により1878年に創刊された学術雑誌です。当初は月1回、のちに月2回のペースで刊行されました。名古屋大学史上最初の定期刊行物です。
6	「(愛知)医科大学陸格祝賀」絵はがき	
7-①	愛知県立医学専門学校卒業証書〔複製〕 1905年(明治38) 加藤延夫氏所蔵(愛知県公文書館寄託)	加藤鎌五郎は、愛知医専卒業後は政治家を志し、名古屋市会議員、愛知県会議員をへて、1924年(大正13)に衆議院議員に初当選しました。以後、当選12回、通算30年間もその職にあり、戦後は法務大臣や衆議院議長を歴任しました。1944年(昭和19)には、名古屋帝国大学医学部から博士号を取得しています。愛知医科大学の官立移管や、名古屋帝国大学の設立にも尽力しました。
7-②	奈良坂源一郎在職25年記念式典(県会議事堂)招待状〔複製〕 1906年(明治39) 博物館所蔵	奈良坂源一郎は、東京大学医学部を卒業した1881年に愛知医学校へ赴任、以後40年間にわたって、熊谷幸之輔(1883~1916年の校長)とともに、愛知医学校、愛知県立医学専門学校を支え、生涯を捧げた解剖学教育のほか、1891年に愛知教育博物館を設立するなど地域の自然科学教育にも尽力しました。近年、孫にあたる奈良坂宏氏から、源一郎が残した貴重な資料が名古屋大学博物館に寄贈されました。
7-②	医学校創立係申付書〔複製〕 1873年(明治7)	1873年(明治7)年3月、柴田邵平ら愛知県仮病院の医員数名が医学校創立係を命じられました。
7-②	柴田邵平愛知医学校一等助教諭任命書〔複製〕 1881年(明治14)	
8-①	聴力検査機器(名古屋医科大学) 博物館所蔵	

展示ケース 番号等	展示品名(題目)等	説 明 文 等
8-②	愛知医科大学附属医院のカルテ 博物館所蔵	
8-③	愛知県病院副教師足立盛至が使用していた 伝わる天秤 博物館所蔵	足立盛至(1836～1896)は鹿児島県士族で、鹿児島医学校の教師をしていましたが、1873年(明治6)5月に愛知県仮病院が西本願寺掛所で再興された時、お雇い外国人ヨンゲハンスとともに教員として迎えられました。当時の記録によると、一時は「病院事務総括」を兼務しており、病院の指導的な地位にあったと推測されます。また足立は、毎月10円を病院に寄附し、それが100円に達したとして、内務省から銀盃を賞与されています。そして1876年4月、任期が満了した足立は、ヨンゲハンスとともに病院を去りました。この天秤は、盛至の曾孫にあたる足立葉一氏から、名古屋大学博物館に寄贈されたものです。
8-④	足立盛至の写真(1872年、名古屋に赴任する前年) 足立家所蔵	
9-①	愛知医学校解剖局の顕微鏡 博物館所蔵	
9-②	愛知県立医学専門学校のマイクロトーム 1910年(明治43)頃 博物館所蔵	マイクロトームは、プレパラートを作成するため、観察試料を極薄かつ均一の切片とする器具です。
貼りパネル	式辞(在愛知県立医学専門学校中華民国留 学生総代林世偉)〔複製〕 博物館所蔵	
10-①	名古屋帝国大学・名古屋医科大学の学印 〔複製〕	いずれも現物は石製です。「名古屋帝国大学之印」は、印材に亀裂が入ったため、たこ糸を巻いて補強されています。もう1つの「名古屋医科大学之印」は、印材の厚みがわずかしがなく、印面裏側には鋸で切断したような痕跡が見られます。名医大の学印の印面を切り落としたあとの印材を再利用したものとされます。
10-①	『名古屋帝国大学一覽』 1942年(昭和17)	
10-①	名古屋帝国大学医学部学生の講義ノート (齋藤眞教授の外科学) 1940年(昭和15)	
10-①	「開学式に関する記録書」	1943年に挙行された、開学記念式典の関係文書が綴じられたものです。
10-②	名古屋帝国大学博士学位記 1939年(昭和14)	
11	名古屋帝国大学開学記念絵はがき 1943年 (昭和18)	カラーの絵図(「完成後の名古屋帝国大学」)は、当時実際に立案されていた東山キャンパスの構想が描かれています。5枚1セットを包んだ紙の裏には、当時の東山キャンパスの地図が描かれていました(第2コーナーの展示パネル参照)。
11	洪沢元治総長『我等の学園』〔複製〕 1943 年(昭和18)	当時の「総長懇談会」(第2コーナーの展示パネル参照)に使うため、洪沢総長が話す内容をまとめた小冊子です。本展示会場内において、ハンズオンで中身を閲覧できるようにしてありますのでご覧ください。
11	『名古屋帝国大学概況』 1942年(昭和17)	
11	『名古屋帝国大学創立概要』 1943年(昭和18)	
12	新制大学院の設置認可申請書	
12	新制名古屋大学の設置認可申請書 1948年 (昭和23)	岐阜農林専門学校を基礎にして農学部を新設する構想がありましたが、それが断念を余儀なくされたため、1949年の新制名古屋大学のスタートには間に合わず、実際に農学部が設置されたのは1951年でした。
12	庶務課「連合軍指令綴」 1946年(昭和21)	
12	庶務課「連合軍最高司令部発 没収図書指 令綴」 1946年(昭和21)	

展示ケース 番号等	展示品名(題目)等	説 明 文 等
13	教養部授業時間割 (1956年度前期、文科系1年、第1期)	
13	『名古屋大学附属図書館案内』 1955年(昭和30)	
13	『学生便覧』 1956年(昭和31)	当時、キャンパスが分散していたことから、キャンパス間にスクールバスが走っていました。
13	名古屋大学管弦楽団 第九回定期演奏会 ビラ 1958年(昭和33)	
13	第4回医学祭 ビラ 1960年(昭和35)	
13	「名古屋大学大学祭」のパンフレット 1957年(昭和32)	この年、開学記念祭を大学祭と改称して開催されました。「名大祭」となったのは1960年のことです。
14	『名古屋大学新聞』号外 1959年10月2日付 (伊勢湾台風) 災害救援特集	
14	(文) 学部長選挙学生模擬投票用紙	
14	『名大協組ニュース』第43号 1958年(昭和33)	
14	大学院自治会『自治会報』第1号 1962年(昭和37)	
14	日米安全保障条約改定反対ビラ(全学自治会連絡協議会/名大祭実行委員会) 1960年(昭和35)	
14	ゼネスト支持を呼びかけるビラ(名大音楽サークル協議会) 1960年(昭和35)	
14	大学院生の待遇・環境改善の要請文(大学院自治会連絡協議会/大学院自治会連絡協議会奨学金問題小委員会) 1962年(昭和37)	

※「展示番号等」の数字は、本記録掲載の写真と対応している。

※「〔複製〕」等と但し書きがないものは、全て原物を展示した。

※所蔵者の明記がないものは、全て大学文書資料室所蔵。

※展示ケース8-③の天秤は、昭和戦前期の製作によるものとの説44が有力となり、現在確認中である。

(2010年4月11日受付)